



求道

第 六 卷
第 三 號

求道第六卷第參號目次

求道

◎招喚の聲

自督

◎義なきを義とす

講話

◎念々の満足

告白

◎逆縁の御手引き

雜錄

◎信仰の道程

聖傳

◎ヂヤータカ釋尊傳

第十六 誓の捧物

第十七 猿と惡魔の話

第十八 計策ある鹿の話

第十九 同族を助けよ

慶讃

◎十七憲法

嘆咏

◎營中雜咏

時報

近角常觀
増田八風

◎歸省傳道

毎日曜午前九時

求道學舍

〔本郷森川町一番地〕

毎土曜午後二時

第二 求道會

〔九段坂佛教俱樂部〕

毎月二日午後七時

第三 求道會

〔日本橋堀越町説教所〕

求道

第六卷
第參號

招喚の聲

信の一念は吾人の内心に大悲招喚の御聲の響きたる端的也。善巧矜哀の御手の達したる心地なり。御親の顔を仰ぎたる喜悅なり。微笑の光明の閃めく満足なり。『汝』と呼び掛けたまふ大慈悲心の胸底に徹到して覺えず頭を下けたる歸依信順の姿也。『唯』と應じたる極惡深重の我等既に心光の慈懷に攝取せられたる如來の眞子と成れる也。親鸞聖人愚禿鈔に曰く、西岸上に人ありて喚て言く、『汝一心正念にして直に來れ、我能く護らん』とは

「西の岸の上に人ありて喚て言く」とは阿彌陀如來の誓願也。

『汝』の言は行者也、斯れ則ち、必定の菩薩と名く、龍樹大士の十住毘婆沙論に曰く、即時入必定と。曇鸞菩薩の論に曰く入正定聚之數と。善導和尚は希有人也、最勝人也、妙

好人也、好人也、上上人也、眞の佛弟子也と言へり。

嗚呼此西岸上の御聲の聞えたる一念、即ち吾人の信界に如來本願招喚の勅命を認めたる也。『汝』と如來より呼ばれたる我は既に佛子の自覺身に溢れて悲喜の涙に堪へざる也。如來自ら『我』と呼ひ、『汝』と呼びたまふ御親の聲の吾人信界に響ける時は、もはや生死流轉の孤兒に非る也。孤獨寂寥の迷兒に罪る也。和讃に曰く「超世の悲願きしより、われらは生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、こゝろは淨土にすみあそぶ」極惡深重の衆生大慶喜心得て、諸の聖尊の重愛を獲の身とは成り了せる也、如來の愛兒也。佛陀の寵兒也、必定る菩薩也。正定衆の菩薩也。彌勒に同じといひ。釋尊は親友と呼び、觀世音大勢至は勝友と爲りたまふ。人中の蓮也、泥中の花也、眞の佛弟子也。如來の眞子也。『聖人のつねのおほせに、彌陀の五劫思惟の願をよくく、案ずれば、ひとへに親鸞一人が爲なりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと御述懐さふらひしことを(乃至)されば、かたじけなくも我御身にひさかけて、われらが身の罪惡のふかきことをもしらず、如來の御恩のたかきことをもしらずしてまよへるを

もひらせんがためにてさふらひけり、まことに如來の御恩といふことをば沙汰なくして、われも、ひと、よし、あしといふことをのみまふしあへり。

嗚呼、これなる哉、これなる哉。如來の御恩といふことを認めざる我等は徒に、是非善惡を云爲して、前後左右の水火二河群賊惡獸に苦しめる生活也。無人空過の澤といふは常に惡友に隨て、眞の善智識に遇はざる也。此人の單獨なるを見るときは、獨生、獨死、獨去、獨來、信仰問題として孤獨寂寥の境に陥るときは、骨肉の情も救ふ能はず、友愛の涙も濕ずあたはず、茫々たる沙漠を行くが如く、茫々たる曠野に迷ふに似たり。眞に親鸞一人也。二河喩中の行者は一人也。況んや煩惱の六賊身に迫り、罪業の惡獸心に逼り、奸詐嫉妬の蛇蝎内心に蟠りて我心を嚙むに至りては吾人亦世界の廣さ、殆んど身を置くの餘地なからんと欲す。嗚呼二河の譬喩はいかに適切なる煩悶懊惱の吾人の胸中を描き盡して餘蘊なしと謂ふへし。

今にして之を想ふに、吾人十三年前人生問題に煩悶して、苦しめる心狀を顧るに、「即ち自ら思念すらく、我今同らは亦死せん、住らは亦死せん、去らは亦死せん、一種として死を

『直』の言は廻に對し、迂に對する也。又直の言は方便假門を捨て、如來の大願他力に歸せしめんとなり。諸佛出世の直説を顯はしめんと欲して也。

『來れ』の言は去るに對し、往くに對する也。又報土に還來せしめんと欲して也。

江洲の了信、香樹院師の病床に伺候す。心中を披瀝して曰く、間違はさぬの仰をきいて、間違はして下さらぬこと、信ぜさしていたゞきました。香樹院師聲に應じて曰く、それは惡い、間違ふの間違はぬは穿鑿しや、八十通の御文にその様なことは一ヶ所もなし、「すぐこい」との御呼聲が聞えたら「ハイ」ふりむくばかりじゃや、これがたのむ心じゃ、淨土を願ふのじゃ、落し咄しの落ちた心持じゃ、落ち口の分からぬものに面白くない、この分かつと分からぬとが宿善をやと。嗚呼何等の好語、何等の安慰、何等の解脱、常に没し、常に流轉して出離の縁あることなし。千尋の懸崖手を放ちて、思ひ存分落ち得る所以のもの、直に來れの御聲にふり向く一念、既に攝取の御手にたすけられ了せば也。間違はして下さらぬこと、信ぜざる、事既に迂也、廻也、いらざる入念なり、無用の穿鑿也。髪を容るゝの間、既に千里の隔あり。唯恨くは衆生

免れず」と云ふもの、其真相也。『福間氏獲信之記』に「狂するが如く亂するが如く、この五尺の體軀を如何に處して可なるべきやを知らず、夢の如くにして夢に非ず、我にして我に非ず、進まんが、進むに路なく、退かんが、退くに所なく、此に至りて煩悶苦悶の極點に達し、人類の失心する正に此苦痛の一時時にあるを覺へしむ」といふもの、正にこれ二河譬喩の再寫に非ずや。

『其刹那其瞬間、フト吾人は佛陀が吾人を助けたまふといふことを聞きしものに非ずやとの一念予が心頭を刺感したり』と是れ實に大悲召喚の御聲の心中に響きたる一念也。『汝』の御語肺腑を貫きて御親の矜哀に醒覺したる端的也。『直に來れ』の御聲耳に響きて眞心徹到せる無上淨信の曉也。然るに此一瞬時の回想によりて、今の今まで堪へがたかりし病苦煩悶は頓に予が心頭より四散して、予は夢の如く期せずして、自然に南無阿彌陀佛の名號を稱したりき、噫」と。是即ち一心正念の眞狀也。眞摯なる至心歸命の發露也。愚禿鈔に曰く、

「一心」の言は眞實の信心也。

『正念』の言は選擇攝取の本願也、又第一希有の行也、金剛不壞の心也。

疑ふまじきことを疑ふことを、淨土對面して相忤はず、彌陀の攝と不攝とを論ずることなかれ、意専心にして廻すると廻せざるとに在り。既に慈顏歷々として西岸上より照したまふ、汝の一語を聞く一念吾人對面相忤はず、間違ふと間違はさぬと、攝と不攝と、何ぞ我等の關する所ならん。唯直に來れの招喚にふり向くと否との別にあり、是れ眞に落ち口の分かつと分からぬの界目也。世上の無分曉漢、落語を聞きて猶其後を聞く憐むべき哉落ち口の分かつとは罪惡の我等無有出離之縁と落ちたる心持は言ふに言はれぬ味也。これ即ち罪惡の谷の深きことの知れたる也。如來の御恩の山よりも高さことの知れたる也。そくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよとは實にふりむく信の一念なり。彌陀の五劫思惟の願をよく案ずれば、ひとへに私一人がためなりけり。直に報土に還來せしめんと慈母の選擇願心の辱じけなき、『我能く汝を護らん』願みれば身は既に攝取心光の悲懷に在り。愚禿鈔に曰く、

『我』の言は盡十方無碍光如來也、不可思議光如來也。

『能』の言は不堪に對する也、疑心の人也。

『護』の言は阿彌陀佛果成の正意を顯す也、亦攝取不捨を形

はすの貌也、則ち是れ現生護念也。

我とは盡十方無碍光の慈母也、不可思議光の悲懷なり。綱島梁川氏は『盡十方無碍光如來』の慈光を仰ぎ、福間氏は『至大無上のこの光景を描寫する如きは、遺憾ながら余に其文字なし、たとひ余に文章の才ありとするも尋常の人事に非る此感想を描寫せんは不可能の事なるべし』と。嗚呼不可稱、不可説、不可思議なる哉。『能く』とは如來の御力也。『能く』の聞こえたるは御力を信じたる也、『はい』とふり向くと否とは『能く』の信ぜられたると否と也。歎異鈔に曰く、『口には願力をたのみたてまつるといひて、こゝろにはさこそ惡人をたすけんといふ願不思議にましますといふとも、さすがよからんものをこそたすけたまはんずれとあもふほどに、願力を疑ひ他力をたのみたてまつるこゝろかけて邊地の往生をとげんこと、もつともなげきあもひたまふべきことなり』と。是不堪と思へる人也。疑心の人也。『五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、ながく生死をすてはて、自然の淨土にいたるなれ。金剛堅固の信心の、さだまるときをまちえてぞ、彌陀の心光照護して、ながく生死をへだてける。』是れ汝を護らんと。の御手に攝取されたる也。如來の膝下に照護せられたる

自

督

義なきと義とす

○他力には義なきを義とすとは親鸞聖人御一代御教化の骨目と同奉ることである、ことに晩年に至りてはほとんど此御言の口に絶へたことはなかつたらしく伺はれる。

○此御言には無限の味がある、いふまでもなく、聖人か度々末燈抄等に御しめしなる如く、義といふははからひのことである、他力には自分のはからひなく、全く如來のはからひの御力ばかりである。

○御慈悲に氣附かせて下さつてから僅かに十年あまりの生活を回顧してさへ、實に如來の御はからひの極りなきに驚き且つ感謝することである、聖人が晩年に口癖の様に申されたは、如何に如來の御はからひの絶大なるかを御喜ひなされたことであらう。

○此如來の御はからひの分からぬかぎり人間は自分のはからひの去らぬものである、大なる力につかまらぬまでは、い

也。嗚々として泣くも慈懷の中に在り。睡眠懶惰なれども二十九有に至らず。十方群生海斯行信に歸命したてまつれば攝取して捨てたまはず故に阿彌陀と名づけたてまつる、是を他力といふ。德號の慈父光明の慈母、我を呼び我を生み、我を教へ我を養ふ。永劫護持養育の感恩、身に粉にするも報し難く、骨を粉にするも謝し難し矣、於戲、南無阿彌陀佛。

光玄寺の坊守

加賀の光玄寺の坊守曰く、私は折り／＼はい／＼、信心を得奉りたれば、やれ／＼此の様な淺聞しき心も起りてもないものぢやと存ぜられますが、是れは如何心得へましたらば宜しう御座いますかと。

講師曰く、段々聽聞をして信心を申たならば、この身からだにかはり目がつく様に思へども、昔にかはらず、かはり目はつかぬ。併し段々と聽聞を申し、我が身の上も次第／＼に年がよればよるほど外にかはりなれども、吾が身の燃るさが明かに知られ、又大悲の方をながめて見れば、彌々明かに御慈悲といふことが知られるばかりぢや。

光玄寺坊守、左様ならば、折り／＼箇様な心が起りましても御助けの御覺にはなりませぬかと。

講師曰く、御文の中に罪はいか程深くと仰せられた。あのいかほどともある中には、一切凡夫の思はくが納められて罪はいかほど深くとあるれば、案じることはないとの仰せなりと。

一塵の面々、さて／＼そんなことは存じませず、然らば頼む一念に、何も角も、算用すまして下された御慈で御座りますかと心を流して喜びしとなり。『香月院語錄』

かに、きんだところて色々自分とはからはねばならぬ。

○自分のはからひをやめて、如來のはからひにまかすと云ふと、何人も自力をやめねばならぬと、きむのである、他力にまかさねばならぬと、きむのである、きんてやめた自力もきんてまかした他力もやはり自力である。

○この大なる御はからひが他力である、不思議である、佛智不思議である、親鸞聖人も聖德太子の御導によりて、法然聖人に遇ひ、先づ此佛智不思議を信ぜられたが、聖人の他力である、本願力である、眞宗である、和讃に佛智不思議の誓願を、聖德皇のめぐみにて、正定聚に歸入して、補處の彌勒のごとなりとある。

○聖人が御一代は徹頭徹尾此佛智不思議の具體的實現である、而して云ふまでもなく聖德太子と法然上人は此佛智不思議を人生上聖人に見せしめられたる二個の燒點である。

○聖人が一代の間、聖德太子に手を引かれたまひたることは實に著しい、求道心の切實にきりつめたも、いよ／＼多年の願の満足して、法然上人に遇はれたも、一たび入信して已上人生上の生活の始終に至るまで一々聖德太子の御命であつたことは一點の疑の入るべき餘地を見出さぬ。

○聖人の一代につきて世に分かりにくい點がある、聖人を信するものは不可思議と之を信ず、聖人を疑ふものはますます之を疑ふのである、そしてたとい佛智不思議と信するものも事實が明らかにならぬまでは猶信じつゝも朦朧たるものであるが、聖人の事實を明らかにすればする程、佛智不思議がますます分明に輝てくる。

○佛智不思議といふは、凡夫が分からぬと暗にして置くことではない、佛智不思議があらはれてくればくる程、佛智が輝てきて、凡夫のはからひの疑がはれてくることである。

○我等は一たび如來の御恵みをいたゞきて他力の大なることを仰ぎたる已上は聖人の一代を必しも細かにしらずとも其一言一行の下に其全體の光明を仰ぐことが出来るが、しかし、詳かに知れば知る程ますます其御はからひの大なるを知る。○其御はからひの大なることが知れる度毎に従來しらずしらずの間に我はからひの疑の上を蔽ひつゝあることを自覺せしめらるゝ次第である。

○聖人が聖德太子や法然上人を信ぜられた態度といふものは世にも比類なき絶對的のものであつた、これ云ふまでもなく、つとめた態度ではない、所謂佛智不思議の實現なるが故に信

ぜざらんとするも信ぜざるを得ざる次第である、たとひ人生的に危険が来るも、甚だ時代精神と衝着する様になつても是亦致方もないことである。

○たとひ法然上人にすかされまゐらせて地獄におちたりともさらに後悔すべからず候と告白したまひた聖人は大師上人若し流刑に處せられたまはずは我亦配所に赴んや、若し我配所に赴かずんは何によりてか邊鄙の群類を化せん、是猶師教の恩致也と感謝したまふは寧ろ聖人に於ては當然のことである。

○聖人が聖德太子の導を得られたる事實が明かなればなる程、ますます聖人の御一代は佛智不思議の體現たることが分かり、又聖人が法然上人をいかに信じて居られたかを知れば知る程、聖人の信仰か不思議の佛智夫れ自身たるかを知るべきである。

○一寸考へると聖德太子を慕はれたと法然上人を信ぜられたとは趣を異にする様であるが全く同じである、普通に考へると聖德太子を理想的に渴仰せられたやうに見えるが、聖人には歴史を超越して、直接に接せられたのである、是れ告命といふ所以である。

○法然上人を信ぜられたは面授口決なれば唯信仰を傳へられ

たやうに見えるが、信仰を傳へると同時に、法然上人が信仰

夫自身の内容に入りて仕舞ふたのである、即ち彌陀の本願を信するや否や法然上人は本師阿彌陀如來の本願を傳ふべく體現せられたる大勢至菩薩と信ぜざるを得ぬのである。

○一寸考へると理想のみにみへる聖德太子が歴史を超越して直接の接觸となり、歴史的に接觸しつゝある法然上人が同時に理想的に永久の光明としてあらはれるのである。

○此等の人生的事實と之を實現する偉大なる御力は實に佛智不思議である、而して之を九十年の久しき實驗されたる聖人が晩年に唯義なきを義とすのみ申されたは如何にも味深きことである。

○聖人が御流罪頃までに聖德太子と法然上人とを渴仰されたはいかにも尤であるが、晩年歸洛の上に於て益々其歸依信順の情の濃かなると護持養育を感謝せられたるの深廣なるには、益々聖人の信仰の深厚なるを仰ぐべきである。

○これは法然聖人及び聖德太子の和讃に於ても十二分にあらはれてあるが、世に傳はらざるものに於て必ず澤山ありたるに違なう。

87 ○全體義なきを義とすといふ言は法然上人が御在世の時に申

されたる言葉である、其事は皆て歎異鈔講話に詳述したことであつた、其義なきを義とし、様なきを様とすといふ言葉を以て他力の至極を言ひあらはされたは實に無限の味である。○この様なことをかくも皆はからひである、聖人であへ、誓願をはなれたる名號も候はず名號をはなれたる誓願も候はずかく申し候もはからひなりと申された、たゞ不思議と信じたてまつればとかくのはからひなしである、これが義なきを義とすの極である。南無阿彌陀佛。

一、十方の諸佛方が、自國の菩薩に對し、彌陀の淨土にすまやかに至るべし。はやく至れよと、能く勝る彌陀の淨土ゆへに、早く到れよ、うろ／＼して居らずとも、速やかに彌陀の佛國に往生せよとのたまふ、彌陀の此の世御出現もこのためなり。速疾超便とせき立てゝくださるなり。

一、彌陀の因位不可思議永劫が間、衆生を助けたひびひと、思召された大勢願心は南無阿彌陀佛の外には無い。至心は至德の尊號を體とする。兆載永劫が間、清淨ならざるなく、眞實ならざることなし。大悲願心の其の體は南無阿彌陀佛なり。

一、彌の寶を數へても、我が寶にはならぬ。唯名號の謂れを知りつけたてて、念持せざればなんにもならぬ。一念の信心の處で、南無阿彌陀佛が我が寶になるなり。

《香月院語錄》

講話

念々の満足

（求道學會日曜講話）

近角常觀

上

今日の題は『念々の満足』であります。之は佛の廣大なる慈悲を一度頂いて、心中に言ふ可らざる満足を得れば、其後の世渡りは念々の満足である、といふ考で此の題を出したのであります。

其處で此の念々の満足を得させて貰ふ一番、こゝとは何處であるか。と申しまするに、言ふ迄も無く我々が此世で一番初めて佛の慈悲に満足させて貰ふ初一念である。即ち我々が佛の慈悲に氣が就いて心中初めて一念の満足を得る、此の一念の信が肝腎であります。扱て此の一念の満足を頂いて見ればその後の人間の世渡りは念々が満足である。『口傳鈔』の中に「一念が自然と多念に及ぶ道理である」と示し下された如く、一念佛の慈悲に満足させて頂いて見ると、其後は其時々念々に満足させて貰ふ事が出来る。いつ如何なる時でも佛の恵みて満足させて貰ふ事の出来るのが念々の満足である。今日は此點から話させて頂き度いと思ふのであります。

佛の本願力を觀するに、遇て空く過る者無し、能く速に功德の大寶海を満足せしむ。

と相示し下された御文である。之は實に難有き御文で、親鸞聖人の御影の上の讃文といふと、いつても此の御文に定まつて居る位のものである。之を又親鸞聖人は和讃の中に叮嚀に解り易く示し下されて、

本願力にあひねれば、
功徳の寶海みちくして、
如來淨華の聖衆は、
衆生の願樂ことごとく、
正覺のはなより化生して、
すみやかにとく満足す。

むなしくするひとずなき、
煩惱の濁水くたてなし。

とある。是れ又實に有難い御和讃であります。今此の和讃の有難き味ひを頂けば、本願力にあひねれば、——先程より申すが如く人生の事に頼みになる物は一つも無い。名譽財産決して當てにならず、親子妻子と雖も時來れば別れねばならぬ。

斯くの如くして人生の上に眞に頼みになるまことといふものは一つも無いのである。然るに其者を哀れんて其者を飽覧見捨て給はぬ佛の御親心の塊が本願である。我々此の本願に遇はせて貰うた事が何より有難い。我々今日斯く寄り合うて共に喜ばせて貰ふといふのも、つまり此の如來の廣大なる本願に出遇はせて貰ひ、其の廣大なる大悲を喜ばせて貰ふのである。此の佛の恵みに出遇うて見れば、佛の本願は十方衆生との呼聲故、一人と雖も洩れる者は無い。否な佛より言へば此の恵みを知らせようとして、昔より我々一人々々に向ひ積みにして下さるのである。其の廣大なる御親心が我々衆生の心中に届いて下されて、あゝ有難いと頂いた時が即ち本願に

第一に人間の満足は、佛の恵みを知らせて貰ふのが一番の満足で、人生是程の満足は無いのであります。普通世間で満足と言つて居るのは、或は此世の財寶で満足し、或は自分の無事健康なる事で満足する。其外此の世の所謂満足なるものを數へて來れば、或は妻子によりて満足を見出し、或は名譽を得て満足だと言つて居る。けれども之等は人間の淺間しき有様で、之等の満足は眞の満足では無いのであります。であるから之等人生上の満足に於ては、有るが上にも有るを望み、無ければ更に之を得ん事を願ふ。或は一たび得ても又失ひ、失ひては又得ん事を願ひ、得ては又失はん事を恐れるといふ有様で、本當の満足といふ事は何うしても無い。毎も能く申す事でありますが、實に此世は「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界、よろづの事皆以てそらごとたわごと、まことある事無し」である。之ならば眞に當てになる、之ならば何時迄も遺るといふやうな物は、此世の中には一つも無いのであります。其の頼みにならぬ世の中に在つて、我々自身は何うであるか。といふに相互に朝夕止まぬ所のものは心中の煩惱である。或は善ければ善くて憍慢の心を起し、惡しければ惡しきで徒に悶々悲んで居る。斯の如き煩惱具足の我々の上には満足といふ事は一も無い。處が此の煩惱具足の凡夫火宅無常の世界の上に、眞の佛陀の親が居て下さる、廣大なるまことの恵みが向つて下さる。人生是程大なる満足は無いのであります。

此の満足といふ言葉を話すに就いて、第一番に申したいのは『淨土論』の中に天親菩薩が、

遇ひ奉つたのである。殊に此の「遇ふ」の言などは信仰て無くては頂く事の出来ぬ有難い言葉であります。『大經』の中には又

斯の光に遇ふ者は三垢消滅し、身意柔軟にして歡喜踊躍し善心生ず焉。若し三塗勤苦の處に在つて此の光明を見奉れば、皆休息を得て復苦惱無けん。壽終の後皆解脱を蒙る。

といふ御文も有る。我々が此世で阿彌陀佛の光に遇はせて貰うた有様は、恰も長の道中、ゆくりなくも舊知に出遇ふが如きものであります。我々は久しく三塗勤苦の巷に流轉して惱みと罪に少時も暇が無い。中々此方から求めるやうな奴では無けれども、佛の方から我々を捜して下さる。そうして遂に其の廣大なる御親心に搜し當てられて慈悲に氣の就いたのが「本願力にあひねれば」であります。「むなしくするひとずなき」——佛は一度本願力に遇ひ奉つた者を空しくし給ふやうの事は決して無い。必ず其の一念に廣大なる恵みの中に引き込んで下さる。茲の味ひは餘程能く頂かねばならぬと思ひます。他の和讃には又次の如く示し下された。

金剛堅固の信心の
彌陀の心光攝護して、
なかく生死をへたてける。

金剛堅固の信心の定まる時を佛は今かくと待て、下さるのである。であるから本願力に遇ひねれば空しく過し給はぬので無く、何人も此の廣大な恵みに出合へば之を頂かずには居られぬのである。つまり人生々死の苦海に右にも左にも安心の處無く苦しんで居る我々である。然るに其者を哀んで下さる大悲の御親心が我々に映つて下されば、何人も之を有難い

と頂かすには居られぬのである。阿彌陀如來の本願は我々が善き事をしたら助けるとの御慈悲ぢや無い。其の罪深く苦しめる者が哀れだとの廣大願心である。其の廣大願心が此の罪深く慕せる我々の心中に届いて下されば、水の低きにつくが如く、何人もあゝ有難いと頂かすには居られぬのである。

信仰を頂くといふと何か六かしき事のやうに思ふから頂けぬのであります。信仰を頂くといふのは決して六かしき事では無い。我々が苦める有様を御覽して、佛は其者が可哀想であると、廣大なる慈悲心を以て向つて下さる。我々の悩める有様を見ては涙を以て向つて下さる。佛の御意は何から何迄お慈悲ならざる所は無いのてあります。其廣大なるお慈悲を以て佛は我々が今氣が附くか／＼と待て下さるのである。此の廣大なる慈悲に對しては如何な妄執の我々も「あゝ有難い」と頂かすには居られぬ。即ち「本願力にあひぬれば、むなしくするひとなきである。茲に氣の附いたのが信仰であります。功徳の寶海みち／＼と、煩惱の濁水へたてなし」如何にも有難い御和讃である。我々が此の本願に遇いお慈悲に氣の附く一念に、心中に大満足が來り、廣大なる功徳が行き渡つて下さる。其の有様は如何にも功徳の大寶海が胸中に満ち／＼と下さる如くである。之は誰でも初めてお慈悲に氣の附いた時は、さながら慈悲の海水中に漂へるが如き心地であります。偕て此の功徳大寶海といふは何かといふに、南無阿彌陀佛の六字である。蓮如上人は「御文」に宣はく、それ南無阿彌陀佛とまうす文字はそのかずわつかに六字なれば、さのみ功能のあるべきとおぼえざるに、この六字

の名號のうちには無上甚深の功徳利益の廣大なることさらにそのきはまりなきものなり。云々。

又和讃には宣はく

五濁惡世の有情の、

選擇本願信すれば、

不可稱不可説不可思議の、功徳は行者の身にみたり。

我々は五濁惡世の有情である。選擇本願は即ち佛の御親心である。此の罪惡の衆生、淺ましき心の我々をば飽迄捨てず、飽迄哀れんで下さる御親心の中の御親心が選擇本願であります。其選擇本願は兼ね／＼申すが如く、南無阿彌陀佛の一行を諸善諸行の中より選擇攝取して下された御意であるが、其の選びに擇んで下された御親心は、修行や戒行の出来る者を助けんが爲ては無い。我々罪惡苦惱の衆生は到底修行や戒行の出来る者なるによつて、其者の爲に選擇攝取して下されたのである。茲の處は餘程能く頂かねばならぬのであります。此の點になると『歎異鈔』の中に明らかに示して下されてある。さればよきこともあしきことも、業報にさしまかせてひとへに本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはさふらへ。唯信鈔にも彌陀いばかりのちからましますとしりてか、罪業の身なればすくはれがたしとおもふべきとさふらふぞかし。本願にほこるころのあらんにつけてこそ、他力をたのみ信心も決定しぬべきことにてさふらへ。云々。即ち極端に言へば我々は本願にほこる程の淺ましき惡人である。ぢやによつて其の者を助けんとある廣大の本願である。否な我々が斯く迄罪深き衆生なればこそ、此の者を哀はれみでの御本願である。佛の本願は全く此の極惡深重の私一人の

爲めの御哀れみであります。其處で斯くの如き廣大の御恵みと氣が附くと、我々如き罪深き衆生は此の御慈悲でなくては行けぬと頂かせて貰ふ事が出来るのである。斯く氣が附く一念に、「選擇本願信すれば、不可稱不可説不可思議の、功徳は行者の身にみたり」で、心中に賜はる如來の功徳は何とも口に言ふ事が出来ぬ。不可稱不可説不可思議の無量の功徳が身に満ち／＼と下さるのである。之が信心を頂いた有様であります。此の不可稱不可説不可思議の功徳が我々の心中に充ち満ちて下さる有様は、本來我々の心中は煩惱の濁水の充ち満ちる心中である。我々のする事爲す事は、皆な是れ煩惱惡業である。此世は罪で固めた世の中でありす。此の罪の塊、偽の世の中に此の廣大の恵みを頂けば、功徳の寶海充ち満ちて、煩惱の濁水如何にも有つても少も隔てる事が無い。如何に濁つた河水も大海に到れば同一鹹味になる如く、煩惱は煩惱で有りながら夫が少しの障にもならぬ。茲になる

大願海のうちには、煩惱の波こそなかりけれ、

弘誓の船にのりぬれば、大悲の風にまかせたり。

といふ和讃も同じ味ひである。随分今日は澤山の和讃を申し上げますが之等は皆んな同じ味ひである。何れも有難い和讃であります。唯之等の和讃を申しても喜び極まるのであります。又先程申した「金剛堅固の信心の」前の和讃には、

五濁惡世のわれこそ、金剛の信心ばかりにて、

ながく生死をすてはて、自然の淨土にいたるなれ。

五濁惡世の我等なればこそ、金剛の信心ばかりにて、即ち斯

くの如き者を見捨て給はぬお慈悲と頂く一つで、永く生死を捨て果て、自然の淨土に到らせて貰ふ事が出来るのである。我々が信心を頂いて此世を送り、未來淨土に生れさせて頂く事の出来るのは、唯此の廣大のお恵み一つによるのであります。

次に「如來淨華の聖衆は、正覺のはなより化生して、衆生の願樂こと／＼く、すみやかにとく満足す。」——之れは彌々極樂に参つたとさの有様であります。斯く此の世で本願に遇ひ恵みに満足しつゝ、さて一生を終れば何うかといふに、「如來淨華の聖衆は、正覺のはなより化生して」で、此の人生の夢醒め極樂に行く有様は、佛の正覺の淨き華より自然に化生するといふのである。人間の言葉としては、此の以上に見えて見やうは無い。此の上は其の境に行かねば言へぬのであります。昨日も淺草のある小學校の上級生を集めて講話をせよとの事で、いろは歌の話を爲て來た事でありすが、人生は實に此のいろは歌の通りである。「色は香へど散りぬるを、吾が世たれぞ常ならむ」で、我々は人生の名譽や財産や、花や色やと言つて居るが、之等は皆な散つて仕舞ふものである。そんな物は何んにもならぬ。夫よりも「有爲の奥山けふ越えて、淺き夢見じ、酔ひをせず」で、此の當にならぬ世の中に於て、不思議にも佛の本願に遇ひ、御慈悲を喜ばせて貰へば、其の信の一念に此等有爲の世界より離れさせて貰ふ。さて彌々臨終といふ時が即ち「有爲の奥山今日越えて淺き夢見じ酔ひもせず」である。「あゝ長々淺い夢を見て居つた」「悪い酒に酔うて居つた」と、長き無明の酔も醒め、三

毒の毒も消え、目の覺めた時が極樂無爲涅槃界の佛の境界に行つた時であります。して其の行く有様が今の「如來淨華の聖衆は、正覺のはなより化生して」である。猶ほ此の處に親戀聖人の御左訓があります。

淨華といふは阿彌陀の佛になりたまひし時のほなり。この華に生ずる衆生、同一に念佛して別の道なしといふなり。如來淨華とは阿彌陀佛の佛になり給ひし時の花であるとの仰せてある。實に有難い御左訓であります。其の阿彌陀の佛になり給ひし時の花とは、第拾八願に於て「設ひ我佛を得んに、十方の衆生至心信樂して我國に生れんと欲ふて乃至十念せん。若し生れずば正覺を取らじ」と誓ひ下された法藏菩薩が彌々佛と御成り下された時の華である。迷ひの此の世の花は色は香へど散るけれども、如來の淨華は清淨にして一點の穢が無い。實に永久常任の正覺の華である。極樂の事を蓮華藏世界と申すのは、極樂が此の華の世界である事を言はれたのである。處が此の世で本願の恵みに遇ひ廣大のお慈悲を喜ばせて貰うた者は、命終れば極樂に生れる。其の生れる有様は此の阿彌陀佛が佛と御成り下されたと同じ正覺の淨華より生れるといふのである。實に有難いお示であります。「この華に生ずる衆生、同一に念佛して別の道なしといふなり」とは『證卷』にある『淨土論』の

彼の安樂國土は是れ阿陀彌如來の正覺淨華の化生する所に非ること莫し。同一に念佛して別の道無きが故に、遠く通ずるに夫れ四海の内兄弟なり。養屬無量なり、焉んぞ不思議す可けんや。

といふ御文よりお知らせ下されたのである。之は何うかといふに、極樂は今も申すが如く、阿彌陀如來の正覺淨華の化生する國である。我々は其の國へ如來廻向の念佛を稱へ廣大のお慈悲を喜びつゝ皆諸共に華の中より生れさせて貰ふのである。猶ほ解かり能く言ふと、既に十劫正覺の昔に於て造り上げて置いて下された極樂へ、我々は誰も彼も同一念佛の恵みを以て生れさせて貰ふのである。此の世に於ては貧富貴賤、幸不幸學不學の別があるが、此の往生の一段に於ては別の道は無い。此の世に於て同一佛陀の恵みを喜び、同一念佛の一道を辿らせて貰ふ者は、皆な悉く此の華の中に生れるといふのであります。故に之こそ眞に四海兄弟である。此の世の親子兄弟は唯肉體丈の關係であるが、信仰上の親子兄弟に至つては、實に永久の親子兄弟である。佛は我等が眞實の親、又一佛の恵みを頂いて眞の佛子として頂いた者は、是亦眞の兄弟であります。斯くお互に如來の子として頂き、同一念佛のお恵みを喜ばせて貰へば、誰も彼も兄弟として佛の正覺淨華中に生れさせて貰へる。偕て其の正覺淨華中に生れさせて貰へば「衆生の願樂ことくく、すみやかにとく満足す」である。之は我々か其の正覺淨華中に生れるなり、我々の有らゆる願ひ我々の有らゆる樂みが、此時一度に満足せしめらるゝ有様である。實に是れ満足の極である。無上の慈悲であります。茲の處を初めに申した『淨土論』の文で申せば「能く速に功德の大寶海を満足せしむ」とある處である。我々は死して淨土に生れるなり、速に疾く諸有願樂を満足せしめらるゝのであります。

偕て以上二首の和讃と同意味の御文はそこら中にある。第一初めにも申すが如く親鸞聖人の御影の讃文が此の觀佛本願力の文であります。之は何故かといふに、細かい事は私も知らぬが、親鸞聖人の思召を推察するに、聖人が一代最も深くお喜びなされた處は、天親曇鸞二師のお喜びなされた處である。然るに此の二師の信仰の眼目とも謂ふべきは此の觀佛本願力の文に極はまるのである。故に此の御文を聖人は一際お喜びなされたのでは無いかと思ふのであります。猶ほ之は今不圖氣が附いたのであるが、聖人が一代本願をお喜びあらせられて、常陸國稻田に於て『教行信證』を御製作下された。後代の我々の爲に御製作下されたのであるが、其『教行信證』の出來上がらせた時のお姿を御満足の御影と言ひ、又其時の名號を御満足の名號と申し傳へて居る事がある。之は話が色々になります。聖人が常陸の國で御化導の様子を『御傳鈔』で頂くと、聖人越後の國より常陸の國に越て、笠間郡稻田郷といふところに隱居したまふ。幽栖を占むといへども道俗跡をたづね、蓬戸を閉づといへども貴賤衢に溢る。佛法弘通の本懷こゝに成就し、衆生利益の宿念たちまちに満足す。この時聖人おほせられてのたまはく、救世菩薩の告命をうけしいにしへのゆめ、すてにいまと符合せりと。

とあります。親鸞聖人は廿九歳の御時法然聖人にお遇ひなされて、如來本願の廣大なる恵みをお歡びなされた。此時こそは眞に本願に遇ひ御満足なされたのである。併し御満足は御

満足に違ひ無いが、其の後聖人の御身には種々なる出来事がある。或は法然聖人の門下にあつて色々の事にお遇ひなされ、或は卅五歳御流罪の事があり、又其後は越後より常陸にかけて長々の御苦勞が有つた。而して彌々稻田に於て六軸の聖教を御製作下され、茲に初めて眞宗を御成就あらせられたのである。此の時の御満足の様子が今の『御傳鈔』の御言葉であります。「幽栖を占むといへども道俗跡をたづね、蓬戸を閉づと雖も貴賤衢に溢る。佛法弘通の本懷こゝに成就し、衆生利益の宿念たちまちに満足す。」と、如何にも如來の恵みを充分に知らす事が出来たといふ御満足の様子が見ゆるやうであります。此の時聖人仰せられて宣はく、救世菩薩の告命をうけし古への夢、已に今と符合せり」とあるは、之は聖人御若年の時に夢を御覽あらせられた。夢の中に救世菩薩の告命を受けて東方を見れば峨々たる岳山が有つた。其山に集まれる數千萬億の有情に對して此の告命の眞意を説き聞かすと夢見た事があるが、丁度今の自分と符合して此上の満足は無いと喜びなされたのである。此時の御姿御名號であるから即ち御満足の御影、御満足の御名號である。果して之から來たか何うかは知らぬが、兎に角聖人の御影の上には此の天親菩薩の「觀佛本願力、乃至能令速満足」の御文が有つて、如何にも聖人が信仰上御満足の様子が拜まれ、實に有難いのであります。次に「如來淨華の聖衆は、正覺の華より化生して」の文になると、之はも一步進んで極樂に參らせて貰ひ、満足の上にも満足して、満足此上なき有様であります。之は何處で申しても可いが、私の常に話す親鸞聖人御臨末の御書で申すならば、

聖人が弘長二歳十一月廿八日彌々御往生といふ時に御書がある。

愚禿年つより病に犯され候間、追付往生の本意を遂ぐべく候。今は唯極樂の蓮臺にて一味の衆中を相待つばかりに候。あなかしこ。

聖人御一代九十年の間、如來の本願を西に東に奔せ廻はりて縦横無盡に御聞かせ下され、日本國中津々浦々迄其の廣大の御慈悲をお知らせ下されて、さて彌々御往生といふ時に「今は唯極樂の蓮臺にて一味の衆中を相待つばかりに候」と御示し下されたのである。茲に極樂の蓮臺と言はれたのは、即ち彼土に於て如來正覺の淨華に生るゝ事をお喜びなされたのであります。御臨末の御書といふが猶ほ一通ある。夫は斯うであります。

我歳はまりて安養淨土へ還歸すといへども、和歌の浦の片雄浪のよせかけ／＼歸らんに同じ。一人居て喜ばし二人とおもふべし。二人寄りて喜ばし三人と思ふべし。その一人は親鸞なり。

我なくと法は盡きまじ和歌の浦

あをくさ人のあらんかぎり。

如何にも大満足の極であります。先程も申すが如く我々は極樂に行かせて貰ふ。恰も百千の衆水の海に歸するが如く我々は極樂に行かせて貰ふが、行つた切りて其處に何時迄も留つて居るのでは無い。其の悟の海の浪は又打ちかへし／＼此の人生に歸つて来るのである。「我歳はまりて安養淨土に還歸す」と雖も、和歌の浦の片雄浪の寄せかけ／＼歸らんにあなじ

て、設ひ聖人はお隠れになつても、恰も和歌の浦浪の彼方に打つては此方に歸る如く、此土に歸つて我々を御導き下さるのである。「一人居て喜ばし二人と思ふべし。二人寄りて喜ばし三人と思ふべし。其の一人は親鸞なり」と、我々が一人て喜んで居る時は必ず聖人も其處に來て二人て喜んで下さる。我々が二人寄りて喜んで居る處には、聖人も其處に在りて三人て喜んで下さるとは何たる有難い御言葉でせう。「我なくと法は盡きまじ和歌の浦あをくさ人のあらんかぎり」と。設ひ自分は亡くなつても世に人間の絶えぬ限り、十方衆生の有る限り、必ず何時迄も此世に往來して救はにや措かんと仰せである。之が還相の御利益であります。而して此の親鸞聖人を初めとして、聖人のみならず、極樂に参つた一切の往生人は、誰でも皆斯の如く朝夕此世に往還して廣大の慈悲を傳へて居て下さるのである。我々も極樂も往生させて頂ければ又同様の大益を得させて貰へるのであります。て我々は此人生を苦しいと言つて居るのであるが、斯く氣が附いて見れば此の人生には常に斯くの如き廣大のお慈悲が充ち満ちて居て下さるのである。茲に到りて満足も此上の満足は無い。是れ即ち能く速に功德の大寶海を満足せしめ給ふものである。此の満足の海の中に、お慈悲を喜びつゝ慕すのが、信仰已後の人生である。而して此の満足の人生の結局が、即ち極樂淨土であります。和讃に、

信は願より生ずれば、

念佛成佛自然なり、

自然はすなはち報土なり、證大涅槃うたかはす。

とあるが、即ち茲である。先程より度々繰返すが如く、我々

が此の廣大のお慈悲を堅く頂く處の信は、何から來るといふに、佛の本願より來るのである。佛の本願の廣大なる謂はれを承はれば、我々之を信ぜざらんとするも得ぬのである。而して其信を頂けば、自然と口に念佛が浮かんで下さる。即ち南無阿彌陀佛々々と口に念佛の稱へられるのも自然である。さて斯く念佛を喜ばせて貰うて居れば自然のお恵みて、又必ず自然に極樂淨土に生れさせて貰へる、故に「自然はすなはち淨土なり、證大涅槃うたかはす」であります。而して淨土に参つた者は夫てお仕舞ひかといふに、今も申すが如く和歌の浦の片雄浪の寄せかけ／＼歸るが如く、常に此土に還來して我々を導いて下さるのである。斯くの如く頂けば、實に廣大のお恵みて、満足も満足も、大満足のお慈悲であります。

偕て以上は天親菩薩が『淨土論』に、觀佛本願力、遇無空過者、能令速満足、功德大寶海と示されたる御意であります。さて我々が斯の如き大満足が得られるのは何かといふに之を親鸞聖人の上でいふも、天親菩薩の上で言ふも、又曇鸞大師の上で申すも此の大満足は外て無い。佛の満足大悲のお慈悲一つであります。此の廣大満足のお慈悲一つを頂く一念に、實に斯の如き無上大利の大功徳を満足せしめらるゝのである。此の満足の點より言へば實に未來極樂に生れる迄の大利益を頂くのであるが、之が外て頂くてなく、初めてお慈悲に氣の附いた一念で頂くてあります。先程の和讃に「五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、ながく生死をすてはてし、自然の淨土にいたるなれ」とあるが之である。我々、而も唯の人障でなく五濁惡世の我々である。其の罪に穢れ果て

た我々が、此の廣大の恵み一つと頂くばかりで、長く生死を捨て果て、自然の淨土に到らせて貰ひ、還相廻向の御利益迄も蒙るのである。而して斯く廣大利益を蒙る事の出来る所以のものは南無阿彌陀佛の御恵み一つが居て下されるからであります。和讃に、

南無阿彌陀佛の廻向の、

恩徳廣大不思議にて、

還相廻向に廻入せり。

我々が信仰を頂くといふも、此の廣大なる南無阿彌陀佛の御廻向一つを頂く一念である。其の南無阿彌陀佛の御廻向一つを頂くなり「恩徳廣大不思議にて、往相廻向の利益には、還相廻向に廻入せり」とある。御慈悲を頂くといふも、此の不思議を頂くより外は無いのであります。『未燈鈔』に宣はく、

誓願をはなれたる名號も候はず、名號をはなれたる誓願も候はず。かく申候もはからひにて候なり。たゞ誓願を不思議と信じ、また名號を不思議と一念信じとなへつるうへは、何條わがはからひをいたすべしや。(乃至)たゞ不思議と信じつるうへは、とかくの御はからひあるべからず候。

我々如き惡人の爲に斯くの如き廣大の御廻向があるとは、實に不思議の本願、不思議の名號である。此の如き御不思議が如何にも御不思議と頂かれた時が、即ち不思議を心中に頂いた時であります。何處が不思議かといへば、口にも心にも言うて見やう、考へて見やうが無き故不思議である。今の今迄苦惱に堪へなかつた我々が、お慈悲に氣の附く一念に心底より融けた氣になり、四方八面の暗の夜が頓に明に明け渡る、不思議も不思議も、此程の不思議は無いのであります。其の

恩徳廣大不思議にて、往相廻向の利益には、還相廻向に廻入させて下さる。先程も言ふ如く我々極樂に参り悟の境界に行くと、何時の間にやら恵みに溢れて此世に参り、又衆生化益をさせて貰ふのであります。是れ還相の御廻向であります。又其の次の和讃には

往相廻向の大慈より、還相廻向の大慈をう、

如來の廻向なかりせば、淨土の菩提はいかゞせん。

此の廣大の御廻向が無つたなら、我々は眞に仕て見やうが無いためである。夫に就けても彌々廣大の御恩を喜ばねばならぬのであります。

偕て斯くの如き廣大の恩寵を我々は慈悲に氣の附く一念に頂くのである。其の頂く一念に前念命終後念即生であります。春時く米の中には、秋實のりて又次の年に蒔かれる丈の事が隨つてある。我々が南無阿彌陀佛と頂く一念の信の中に、一生の間安らかに暮らせて思ひ、命終れば極樂に参つて、又此の世に出させて貰ふ、是れ又の恵みがちやんと隨つてあるものであります。我々は命終つて極樂に生れるといふけれども、命の終る時初めて極樂に生れるのでは無い。又極樂に参つて還相廻向に出て來るといふけれども、之も出る時初めて出るのでは無い。一念の信に頂く南無阿彌陀佛の恵みの中に、之等の利益は皆ちやんと思つて下さるのである。此の何とも言へぬ廣大の不思議が、慈悲に氣の附いた一念に頂けるのであります。

已上は一念の信に此程廣大の満足が有る事を申ししたのであります。人間は此の満足が無くては感謝といふ事が有り得

ぬのである。信仰上感謝といふのは、此の廣大の満足を頂いて喜び胸中に溢るゝ所から自然と顯はれ來るのであります。蓮如上人は『御文』に宣はく

彌陀願力の信心を獲得せしめたらん人のうへに於てこそ、佛恩報盡とも、また師徳報謝なんともまうすことはあるべけれ。云云。

心中に不平や不満が有るやうでは、佛恩報謝の思ひが出て來べき筈は無いのである。然るに一念如來の慈悲に氣附かせて貰ふ時は、いつの間にか思はず知らず南無阿彌陀佛と御恩報謝の稱名が口に浮んで下さるのである。斯くの如く慈悲の溢れ出たのが御恩報謝の念佛であります。して見ると一念の信仰以後の生活は常に御恩報謝の思ひである可き筈である。處が茲に大に氣を附けなければならぬ點は、斯くの如き廣大の満足を得、斯くの如き廣大の恵みを頂いて、さて我々が自分々に相續させて思ふ上に於て、常に何等の不満も不平も無いといふ事である。人の事は偕て措き第一斯くいふ私が始終喜ばせて頂いて居ながらも、時々不平不満の爲に苦むのである。此の廣大の恵みに預りながら猶ほ不平不満が起るとは何たる罪惡の私でせう。誰でも初めて慈悲に氣の附いた時は、自分程仕合せの者は無い。所謂國に一人、郡に一人とは我が事である。如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報すべし、師主知識の恩徳も、骨をくだしても謝すべし」と喜ぶのであるが、其の喜びがいつ迄續くか。少時すると心中はもとの煩惱の自分に歸り、思ふ事爲す事する事一々皆煩惱の種

となる。仕舞ひには世間の人を悉く信仰に入れたらどんなに愉快であらうかと、信仰に就いてさへ苦むようになる。斯く苦むようになるは何かといふに、信仰は念々の満足であるといふ事を忘れて居るからであります。之は實に勿體ないのであります。念々の満足といふは何かといふに、初め頂いた一念の満足がいつ迄も後々迄續いて下さるのである。もとゝゝ如來本願の満足は、思ふ事をする爲めの満足でも無ければ、人を教へ導く爲の満足でもない。唯廣大の慈悲一つが何より満足なのである。して此の廣大の恵みは、いつも面變りなく我々の上に照して下さる。斯く氣が附く念々に我々は、いつでも初めの一念に歸りて喜ばせて貰へる。設ひ世の中の不平、不満、不如意が來れば來るにつけ彌々慈悲が有難いと念々に満足させて思へるのである。之が念々の満足であります。所謂後念相續といふは之である。後念相續と言へば何か初めの喜びを失はんやうに自分で努めるのであると思ふ人があるかも知れぬが、さうでは無い。初め一念の信力に相續せられて、何時思ひ出させて貰ふても有難い。斯く念々に喜ばせて貰うて、初一念の満足を何時迄も續いて下さるのが後念相續である。而して此の念々の喜びが口に溢れて御恩報謝の稱名となるのであります。斯くの如く當てにならぬ世の中に在つて、如來の慈悲のみ常に我々を満足させて下さる。我々凡夫は常に不満の心を抱いて、あゝも仕度い、斯うも仕度いと、始終不平ばかり言つ居るのであるが、其煩惱具足の我々に對して佛はかねて知るしめして煩惱具足の凡夫と言つて下さるのである。此我々凡夫を指示して呼んで下さる慈悲が難有

いと一念頂けば、思ひ出す度毎に歡喜踴躍の思ひから、天にも踊り地にも躍る程に嬉しかるべき筈である。然るに其の心の一向に少きは如何かといふに「よく／＼案じみれば天にあと地におどるほどによりこぶべきことをよろこばぬにて、いよ／＼往生は一定とおもひたまふべきなり。よろこぶべきことをおさへてよろこばざるは煩惱の所爲なり。しかるに佛かねてしるしめして煩惱具足の凡夫とおぼせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときわれらがためなりけりとしられて、いよ／＼たのもしくおぼゆるなり」である。踴躍歡喜の心が起らねば起らぬにつけ、彌々頼母救く思ふとは實に是程大なる満足は無いのであります。我々凡夫は此の大悲大願で満足させて貰はぬ時には、満足する時が無い。又此の御恵み一つで我々凡夫が未來は正覺淨華より化生して極樂に生れるのであると安心して居られるかといふに、中々さうは行かぬ。聊か所勞の事もあれば死なんずるやらんと心細く覺ゆる事が度々ある。

之に就きて此間の事でありますが、兼て『求道』に告白迄書いて喜んで居られた齊藤たい子夫人が、鎌倉から手紙を遣して昨夜死ぬかと思つたら心配で心配で堪へられなくなつた、こんな事では仕方が無いから是非一度來て欲しいと言ふ事でありました。不思議の事で、丁度其頃私は横須賀に行く事になつて居りましたので、其序に鎌倉に立寄り、其の方のみならず、色々の方と話させて頂いた。鎌倉あたりで他力信仰の話の聞かぬといふのは、實に珍らしいのであるが、皆さんが非常に喜んで下さる、私も大に満足した事があります。其時私

の申したには、御存知の如く『歎異抄』の中には「いさゝか所
 勞のこともあれば、死なんずるやらん」ところぼそくおぼゆ
 ることも煩惱の所爲なり。久遠劫よりいまして流轉せる苦惱
 の舊里はすてがたく、未だうまれざる安養の淨土はこひしか
 らずさふらふこと、まことによく／＼煩惱の興盛にさふらふ
 にこそ。なかりをししくおぼへども、娑婆の縁つきてちからなく
 してをはるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまい
 りたさこゝろのなきものを、ことにあはれみたまふなり。こ
 れにつけてこそ、いよく大慈大願はたのしく、往生は決
 定と存じさふらへ。」と示し下されてある。之は何うしても
 茲を頂かなければならぬ。佛の本願は我々如き惡しき者、淨
 土に行く事を喜ばぬ者を長く待ち受けて、下さるのである。
 病に悩み苦める者、死ぬ事を忌やがる者なればこそ、佛は之
 を哀れんで下さると氣が附けば、實に是程有難い事は無いで
 は無いか。佛の本願は急ぎ参り度き心の無き者を殊に哀れみ
 給ふのである。我々は皆んな並みて喜ばせて貰ふのぢや無い。
 人と異りて殊に罪深き衆生なのである。然るに其罪深き自分
 に如何なる譯か知らねども、特に此のお慈悲を知らせて下さ
 れたかと思へば、人生是程満足の事は無い。此の満足こそ人
 生眞の満足である。此の満足を斯く氣の附いた一念に頂いて
 其後は念々に此のお慈悲に満足して暮すのが信仰の生活であ
 ると話して参つた事であります。

實際我々は物事が理想的に運んで満足するのぢや無い。又
 自分が思ふやうに出来るからとて満足するのぢや無い。自分
 が惡ければ惡きにつけ、旨く行かねば行かぬにつけ、彌々

満てたまふと。

此の人生の無明の暗を破り、廣大の満足を與へ給ふのが、南
 無阿彌陀佛のお恵みである。我々は理想通り行かぬからとて
 不平など言ふて無く、其の下から南無阿彌陀佛を稱へて喜ば
 せて頂けば、是程有難い事は無いのであります。不仕合せあ
 れは直に轉じてお慈悲を喜ばせて貰ひ、困難來れば又お慈悲
 に戻つて喜ばせてふ。之が本願に遇ひ奉つた身の仕合はせて
 あります。最後にも一首和讃を申せば、

神力本願及満足、

明了堅固究竟願、

慈悲方便不思議なり、

眞無量を歸命せよ。

阿彌陀如來の自在神力は實に不思議の極みであります。
 今日は大層喜ばせて頂きました。私は今夜より暫く故郷に
 歸り、夫より三河地方に傳道して此の月末迄には歸京する考
 てあります。實は三月に入つて已來信仰の時機が順に熟した
 やうに思はれるので、私も東京を空しくする事が甚だ残念に
 思ひます。併し茲に注意すべき事は多くの方が信仰に入つて
 下さる様子を見るに、私のお目にかゝらぬ先きに、私の著書
 雜誌が御縁で喜ばれた方が多いのである。或は其の方が數に
 於ては多いかも知れぬのであります。ですから留守中は是非
 に一入書籍雜誌等を御一覽下され度いのであります。

（二月二十八日）

* * * * *

其者を捨てさせ給はぬお慈悲一つを喜ばせて貰ふのである。

反す／＼も我々の眼の着け處は、此の不可稱不可説不可思議
 のお慈悲一つであります。此のお慈悲の不可思議なる様を申
 せば、第一に斯くの如き廣大の本願に遇へたといふが不思議
 である。遇つて其の御意が我々如きの胸中に届いて下された
 といふが不思議である。此のお慈悲の我々の心に届いて下
 された様は、唯不思議とより言ひやうが無いのであります。
 又此のお恵を頂けば自然と口に南無阿彌陀佛々々と浮んで
 下さるが不思議である。又我々何んの彼のと暮してゐる中に、
 必ず何事も行くべき所に行くのも不思議である。和讃に宣は
 く、

願力不思議の信心は、

大菩提心なりければ、

天地にみてる惡鬼神、

みなこと／＼くおそるなり。

願力不思議の信心に對しては、天神地祇も敬服するとの仰せ
 である。其の如き不思議の信心一つて我々が淨土に行かせて
 貰へるといふのも不思議である。佛は斯の如來淨土に生れる
 事を難思議往生と申されてあります。又其の淨土の事を『眞
 佛土』の卷の初めには、

謹て眞佛土を按ずれば、佛は則ち是不可思議光如來、土は
 亦是れ無量光明土なり。

と仰せられてあります。

偕て以上の如く頂いて見ると、我々お慈悲を喜んで居なが
 ら不平不満の心を起して、色々の事を思ふて居るのは是れ皆
 な煩惱であります。聖人は『行卷』に宣はく、

稱名は能く衆生一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を

告

白

逆縁の御手引き

辻 寛 子

嗚呼、私は何と云ふ幸福な者で御座います。今度近角先
 生の御勧めによりまして、求道に告白をさせて貰ふ事になり
 ました。私は今年二十六歳で御座います。只今より六年前、
 私が二十一歳の春、田舎の或家へ嫁ぎました。半年ばかりの
 間は何事もなく暮しました。其の内家の都合で東京へ出て参
 りました。普通ならば結婚後、間のないことで御座いますか
 ら、楽しく暮さるべき筈で御座いますが、なか／＼そうは参
 りませんで、其頃から良人の様子が氣が付きました。私は全
 身の愛を捧げて居るのに、良人は少しもやさしくしてくれま
 せぬ。他家の御様子を見ましても何となく物足らなく思ふて
 居ました。併しこう云ふ性質かも知れないと思ふたりして居
 ました。その内に一年の月日は過ぎまして、翌年の春に良人
 の姉が亡き人となりましたから、二人の小供が此方へ参りま
 した。それよりは日増に面白くないことばかり、私考へまし
 て斯様に不愉快に日を送りてはつまらない、どうか精神の修
 養を致したいと、心懸けて居ましたが折が御座いせんしてし
 た。或朝のこと、あまりに無理なことを申されまして、もう

とても辛棒が出来なくなりまして、其頃集鴨に無我の愛を説いて下さる先生が御在てになることをかね／＼いって居ましたから、遂に出掛けて行きました、いろ／＼と御話を伺ひ、心が洗はれた様になりました、日々らくに送る事が出来る様になりました。けれども長くはつゞきません、又た苦しみ始めました。此度は本を見たりして慰安を求めて居ました。

丁度三年目の春に突然離縁の申込が御座いました、私の驚き悲しみ、此から先は如何にしたらよいかともう世の中がいやになりました。其時に良人の親せきの者で御慈悲をよろこんで居る人がありまして、私にいろ／＼と御佛様の御慈悲を話して呉れまして、幸に近角先生を存じ上げて居るから、先生に事情を御話して御教を受けたらばよからんと申されまして、忘れも致しません、九月の十三日、雨の降る日て御座いました。先生には御忙しいにもかゝらず、いろ／＼と御なぐさめ下されて御禮の申上様も御座いません。私はつく／＼と其時に思ひました。男は冷淡なものとのみ思ふて居ましたのに、先生の御親切なること、御信心の御有りあそばす方はこんなにもちがふものかと感心致しまして、どうぞ御信心を得たいものと深く思ひました。歸る時に求道を頂いて参りました。それを毎日拜見いたして居ました。

その年の秋に當分別れることになりました、里の方へ参りました。丁度暮のことて御座いました。風の心地で臥て居まして越方行末のことなど考へて居る内に、夢のさめた如くに氣づかせて頂きました。今まで苦しんで居たのは世の中ばかりを見て居たので、難有き親様の在ることを知らず、泡の様な

人生を眺めて苦しんで居ました。佛様が自分を御救ひ下さる爲めにいろ／＼と御苦勞遊ばされた事を知らせていたいたしは、唯だ難有くて泣いて居ました。それから何事も御佛様の御はからひと思ひますから、少しもつらひ事もなく、もう不思議と申すより外は御座いません。目に見る物皆嬉しくてこの心持はともにも拙ない筆には書くことは出来ません。

明けて二月良人が病氣と云ふことを聞きまして、歸つて参りました。それから昨年まで居ましたが、なさ縁と見へまして、とう／＼離縁となりました。先には世を味氣なく思つたり人をうらんだりの事が恥しう御座います。良人は善智識で御座います。若し世間で云ふ如き幸な身でありましたら御信心も得られなかつたて御座います。佛様は特に私をあわれんで下されて此の様な幸な身にして下さいました。申譯のないことて御座いますが、時々御慈悲を忘れませんが、すぐと元のよろこびに返らせて頂くことの出来るのを如何にも難有く存じます。此頃は何一つ心配もなく自分ながら不思議で御座います。若し御信心がなかつたら今頃は如何して居たか、わかりません。先には毎日泣いて居たことも御座いました。何のためにこんないやな思ひをして生きて居るのだろ、親さへなければ死んでしまひたいなどと思ひました。今から考へますと實に申譯のないことて御座います。今の心持をもつと、申上たいのて御座いますが、とても筆にはつくされません。どうぞ御さつしを御願ひ致します。

南無阿彌陀佛。

聖傳

ジャータカ釋尊傳

第十六 誓の捧物

師は一日誓の捧物に就きて語りたまひし事ありき。我等聞きぬ。當時人貿易に趣かんとするや、神に其身の安泰を祈誓して、若し神守護したまはば、歸らば後に供物を捧げんと誓ひにき。其捧物には生物を殺して以て供ふるを例とせり。

是をもて、僧等は此事を世尊に問ひ奉り、其不可なる事を説き給はん事を乞へり。されば世尊は次の如く説き給へり。嘗て、カトシの國に商人ありけり。此人町の入口に立てたる榕樹の神に供物を捧げん事を誓ひて旅立ちせり。恙なく歸りしかば、彼は數多の獸を殺し、「誓を成し遂げぬ」と云ひて樹の前に行きしに、樹神は偈もて彼に誨めぬ。

汝が身にかへて生物を

殺せばやがて汝は死す。

賢き人は御佛の

誠の救ねがふなり。

愚の者は目前の

安祈りて身を殺す。

此後人々かゝる殺生を爲さずして神の國の如く正義の生を

經しとぞ。樹の神とは我世尊なりきと告げたまひぬ。

第十七 猿と惡魔の話

世尊諸處を巡行したまひて、コサラの地を過ぎ同じき名なる村に來り給ひし後、ナラカバーナと云へる湖邊のケタカと呼べる森に住したまひぬ。此時一日ナラと云ふ植物に就きて左の因縁を説きたまへり。

僧等或日ナラカバーナの清き湖に沐浴せし後新發意の針箱にとて持ち來りしナラ竹を見たるに、其竹は根より先に到るまで悉く空虚なりき。彼等怪しみて世尊に行き、此事を問ひ奉れり。「主よ我等は針の箱にせんとて取り奉りしナラといへる植物を見るに、本より先に至るまで空虚なり、其所以は如何にや」と。

「比丘よ其は我前世に命じたる處なり」とて次の譚を語りたまひぬ。

此は昔一つの深鬱なる森なりきと傳ふ、而して其中の湖水には水鬼ありて、水に入るものゝ命を奪ひたりき。

此時菩薩は猿の王として此處に住し、凡そ八千斗りの猿群を率ゐ其大さは赤き鹿の子ほどもありけり。彼は常に危險より他の者を救はんとして見守りぬ。或日彼は猿群を呼び集め、曰ひける様、「我子等よ、此森には毒樹あり、又惡鬼の住める池あり、汝等ゆめゆめ、我に問ふ事なくして樹を食し又水を飲むべからず」と。

一日彼等は嘗つて來し事無き處に到りぬ。およそ一日ばか

りもさまよひしが、時に水を求めて飲まんとせり。彼等は一つの池を見出しぬ。各自一滴ものまずして、前途を眺め其王の今や来るを待ちつゝ池邊に座しぬ。

王來りて彼等に「何故水を飲まざるや」と問ひぬ。

「我等は王の來り給ふを待ちぬ」と答へたり。

「よし我子等よ」といひつゝ池邊に近きあたりを熟視せしに、足跡はあれども下れるものゝみにして返り來れるもの無し。さては必定魔物の住めるなりけりと知り、曰く「汝等はいくぞ振舞ひし、此池に魔物あり」と

魔物は彼等の下り來らぬを見て怖ろしき相形を現しぬ。青き顔青き腹赤き手、赤き足の生物忽然として水上に躍り上りて曰く、

「汝等何故に此處に坐せりや、下りて水を飲むべし」と。

されど菩薩は問ひて曰く、「汝は此處に住せる水鬼なるべし」と。

「然り我は彼なり」と答へぬ。

「汝は池に下り行く總ての者の上に力を持てりや。」

「然り、鳥さへも我は奪ふなり、一つも逃す事あるべからず、汝も亦我は奪はんとす。」

「我等は汝に食はせまじ。」

「さらば飲みゆけ。」

「さなり、われらは水をのむべし、然ども汝の手には落ちじ。」

「さらば如何にして汝は水に達するや。」

「汝は我等飲むが爲に水邊に下り行くべしと思ふが如し、汝誤れり、我等各自はナラ竹を取り、汝の池の水を恰かも水草

の空室より飲むが如くに安くのむべし、汝は我等の上に力を有せず」と。

そは師が次の句に於て其事柄を想起したまへり。

降り行く足の跡を見て、

昇れる足の跡を見ず、

(其時猿に向ひつゝ)

われらはのまんナラをもて、

(次に水魔をかへりみて)

我は汝の餌とならず。

やがて菩薩は持ち來りしナラ竹を取り此世及び他世に於て修習せし十大行(寛大、人倫、克己、才德、礙念、忍耐、眞實、決斷、親切、謙讓)を觀じつゝ竹の中を吹きぬ。忽ち竹は空虛となりて節一つも残さず失せにけり、かくして一つ又一つと吹きぬ。而して菩薩は池をめぐりて歩み、命じて曰く「此あたりの竹は悉く根より先に到るまで貫きて突進なれ」と。

此カルバに於て四つの奇蹟あり。(カルバとは世界の成立せし初めより、其最後の滅亡に到るまでの間を云ふ)其奇蹟は各一カルバ連續すと云ふ。月球中の兎の形は全カルバ連續して消えず。鵝の生れし所(別に譚あり)に於て消えし猛火は再びカルバを通して燃えざるべし。陶器燒の住せし場所は全カルバ焦土として残るべし。此池の周圍に生ずる竹は一カルバ空虛ならん。此等四つはカルバの奇蹟と云ふ。

佛陀はかく命じたまひし後竹の杖を取りて座し給

此八千の猿も各竹の杖を取り池のめぐりに座しぬ。同時に彼は杖を水中に入れて水を飲み亦彼等各も安全に座しつゝ堤の上より水を飲みたり。

かくして水は魔等の水を飲む中一人も獲る事能はずして悄然としてゐのが住處へ引籠りぬ。されど菩薩及び彼の一族は森に再び歸り來りぬ。

師は彼の話を説き明して因縁を結びぬ。曰く、水魔とは提婆達多にして八千の猿群は佛陀の教團、賢き猿の王は我なりと。

第十八 計策ある鹿の話

世尊嘗つてジエタバナに在し、時提婆達多に就きて語り給ひし事ありけり。

一時僧等講堂に集ひて、提婆達多の猛惡なる事を談じつゝ座せり。曰く「兄弟よ、提婆は屬下に多數の弓手を持てり而して岩を投げ、又ダーナバーラカなる象を己が欲するまゝに御して以て大聖を弑せんとせり」と。

師來りたまひぬ。設けの座に着きたまひて問ひ給へる様「比丘等よ、汝等の談り合へるは何に就きてなりや」と。

「主よ我等は提婆が君を弑し奉らんとせる惡逆に就きて語り合へり」と。

師答へて曰はく「今世のみならず、比丘等よ提婆は前世亦同じく惡心を起して而も遂げざりき」と。

次の譚を語り出でたまへり。

昔ブラマダツタ、ベナレスに在りし時、菩薩はクランガなる鹿

と爲り、樹の實を喰みつゝ森の宿に住みけり。一時其鹿は重げにも重げに垂るゝセバンニ樹の果實を喰ひつゝありき。

時に鹿の獵者は樹下に其跡を認むる時は直ちに樹上に臺を作りて座し、木の實を食まんとて來る鹿をば投鎗にて殺し、其肉を賣りさばきぬ。

一日獵師はセバンニ樹の下に菩薩なる鹿の足跡を見出し、樹上に座をしつらひ置き、疾く朝發を終へて、鎗をもちつゝ森に入り、樹に上りて臺に座を取りぬ。菩薩亦朝まだき彼の隱家を出て、セバンニ樹を食まんとて來りぬ。されど樹下に餘り急がずして彼もへらく「臺に座して獵する者は、時には此等の樹にも臺を構へん」とて窺ふべく遠くに止りぬ。

されど獵師は鹿の進み來らざるを見靜止して鹿の前に落つるやう果實を投げぬ。

菩薩之を見ておもへらく「これらの果實は此方へ落ち來りぬ、彼處には獵師の在るに相違あらじ」とて、再三見上げつゝ遂に獵師を看出しぬ。恰も彼を悟らざるが如くよそほひて鹿はつぶやきたり。

「あゝ樹よ、汝はいつも樹の實を落す時は恰も假根の樹枝より垂るゝ如く眞直なるに、今日は汝樹の天性を失へり。かく自然の法則に戻りし事を爲す樹なれば、我は他の樹の下に我食を求むべし」と云ひつゝ次の偈を稱へぬ。

クランガよく知るセバンニよ、

如何なる實をばかく投げし、

何處ぞを我は捜すべし、

汝が實はあまり好まねば。

獵師は臺に座して投鎗投げ出し、叫びて曰く、「行けよ鹿、我は此度は汝を獵り損じぬ」と。
菩薩振り返り見て曰く、「我汝に告げん、やよ獵師よ、汝我を失はんと計ふほどに、八大地獄、十六阿鼻獄、五倍の繫縛と苦惱、汝の業果——を失ふ事なからんよ」と、かくいひつゝ、彼は欲する處に逃れ行きぬ。獵師亦思がまゝに歸り行きけり。師は因果を説きて「其時の獵師は提婆にして、クランガ鹿は我なりき」とのたまへり。

第十九 同族を助けよ

世尊シエタバナに在し、時、一族を利益する事に就て語りたまひぬ。

昔ブラマダツタ、ベナレスに政を執りし時、菩薩は爲せし業にふさわしき報により、犬の生を受け、數百の群をなすつゝ、大なる墓地のあたりに住みき。

或日王は立派なる車に乗じ、乳白の馬にひかせて公園に出でませしが、日暮までも心を慰さめつゝ消遙して日没に宮に歸りぬ。御者等は手綱など用ゐしに宮庭に打捨ておきたり。然るを其夜折あしくも雨降りて綱は濡りぬ。宮に飼はれし犬等は宮の物置より出て來りて革細工や鞭を噛み破りたり。次の日臣等は「犬ども推門より入り來りて革細工、革紐等を噛みぬ」と告げぬ。

王大に犬を怒りて見當る儘に彼を打殺せよと命じぬ。されば茲に總體の犬の滅亡は起らんとせり。逃るゝに由なく、遂に

「そは我知らざる處なり。」

「然らば誰が革を噛みしやをも知らずして、見當るまゝに犬を罰すべく命じたまひしは不正なり王よ。」

「我は犬を殺すべく命じたり、曰く見あたるまゝに彼等を殺せと、如何とならば犬が革の革を噛みたればなり。」

「さらば汝の從者は總ての犬を殺すや、又死もて罰せられざる者ありや。」

「有り、我家の犬は然らず。」

「大王よ只今君は犬が革をかみ破りたるなれば、總ての犬を殺せと命じぬと宣ひながら、今又君のよく育てられし宮室の犬は除外したまふ。此は君まづ裁判の偏頗と不精密の責を免れざるべし。されば如此罪は正義にもとり、又王者の爲すべきにあらず。王の名を有する人は事の平衡を失はざる様心掛くべきにこそ。宮室の犬は罰せられずして哀れる犬は罰せらる。こは總ての犬を殺せとの宣告に反し唯弱者を虐ぐるの謂に非ずや。」

又大聖なる犬ははるかに快き音聲を張り上げて曰く、「大王よ君の爲し給ふ處は不正なり」とて偈もて眞實を誨へぬ。

王の家にて育つ犬

力も生れも良種なり。

かれらをのぞきわれらのみ

罰をうくるは不正なり。

弱きを虐ぐ裁なり。

王は菩薩の云ふを聞き問ふて曰く、「賢き者よ、汝は誰が革の革を噛みしやを知れりや。」

犬等は菩薩なる一屬の住るめる地に入り其群に加はりたり。菩薩は彼等に何故に群がり逃げ來りしかを尋ねしに、曰く「人は皆いへり、車に着けたる革細工、革紐等犬に噛み破られたり、王大に是を怒り、總ての犬を殺すべく命じぬ、我等の危険極まれりと云ふべし」と。

菩薩自ら曰ひける様、守衛堅固なる宮に他の犬の入るべくも非ず、これは必ず宮室の犬の業なるべし、然るを盜犬は殺されずして却つて無罪の犬は失はれんとす、若し我れ王に實の犯人を知らしむるを得ば我等の同族は救はるべし」と。

彼は言葉やさしく一同を慰めて「汝等怖れされ、我は汝等を安全にせしめん、我王にまみえかりてかへり來るまで待つべし」といひぬ。

時に彼は慈悲の想に住し彼の満行を呼び起して願すらく、「我に棒切や石を擲たされ」と云ひつゝ守衛なくして町に入りぬ。人々彼を見しも一人として怒りを起すものなかりけり。

王は犬を滅亡せよとの命を發して後裁の座に在りしが菩薩は憶せず進みゆきて、王の玉座の下に走せ入りぬ。されば王の從者は彼を追ひ出さんとせしに、王は是を止めたり。

彼かくして暫時噫ひしを、玉座の下より出て來りて、王に禮をなし、問ひて曰く、犬を殺すべく命じたまひしは君にましますや。」

「然り我なり」と答へぬ。

「彼等の何の咎ありしにや、人の王よ。」

「彼等は我車の革の掩物や又紐等を喰ひぬ。」

「君は何處の犬が爲せしかを知り給ふや。」

「然り我は知れり。」

「さらば誰なるか。」

「そは君の御家の良種の犬なり。」

「されど如何にして彼等が罪ある事を知るか。」

「我君に證せん。」

「然らば證せよ。」

「良犬を連れ來れ又少量のバタ乳とダッバ草とを持ち來れ。」

王は然なせり。大聖なる犬は曰く「バタ乳にて草をよく搥ねませ犬に飲ますべし。」

王いはるゝまゝに爲せり。犬は各是を飲みしに、悉く嘔吐を催し、皮の切はそれと共に出てぬ。

王は是を見て佛陀に決定されし如く大に喜びぬ。而して彼の勞を菩薩に授けぬ。菩薩は王に十句の偈もて正義を教へ、王に五戒を授け、以後善く裁を行ふべく諫め、又勞を王に返したり。

王彼の諫を聞き、總ての生物に安きをあたへ、菩薩の部下の犬屬に恰かも宮室の犬の如く食を給すべく命じぬ。而して彼は菩薩の教を堅く守り一生慈善や善行を人に施して、命終の後神の國に生れたりとす。

犬の諫言は以後千年の永きも十倍に榮を輝きけり。菩薩はかくてよき長き年を経て死し、又行に順じて生を受けにき。師は此譚を終りて曰く、「王なりし人は今アナンタとして生れ、他の犬は佛の眷屬にして犬の王は我なりき」とのたまひぬ。

雜 錄

信仰の道程

近 角 常 觀

一 絶対他力の信仰は、無限大悲の佛陀の慈悲に接して、一念開發して信樂を獲得するなれば、この信仰に入るに就て、一定の道程と云はるべきものはないのである。つまり此の恵みを信ずると信ぜざるとの二つである。去り乍ら之を人生の方面より考へれば、人が如何にして其の信仰に入るかと云ふことを跡づけることが出来る。換言すれば吾々の力で自力修養の如く或る方法を以て又たある経過を経て信仰に入ると云ふことでない。

二

實は自力に依て到底行き能はぬことが自覺されて、初めて大悲の恵みに氣のつきたる時他力の信仰に入るもの故、他力信仰そのものから云へば、全く道程とはないのである。強いて云へば初めより絶対無碍の大道に入ると云はねばならぬ。去りながらその大道に入るまでに、いろ／＼と右に左に突き當りて行く有様を云ふならば、確かに道程を描くことが出来る。これは親鸞聖人を初めとして、溯りては善導大師、法然上人、

下りては古來の信者、現時の青年の信仰に入るまでが皆之であると云はねばならぬ。

三

以上申したる意味に於て信仰の道程をお話しすれば、信仰問題に於て第一に注意すべき點は、先づ人生と云ふことが問題になる點である。

云ふまでもなくこの點に於ては、必ずしも他力の教のみならず佛教全體の出立點が人生問題に依て立つのである。釋尊が生老病死を見て出家求道せられたるを初めとして、古來の高僧皆人生の生老病死憂悲苦惱に動かされて求道の志を起されたのが出立點である。

法然上人は敵の爲に父が害されたるが出家の動機となり、親鸞聖人は九歳の時に無常を感じて出家せられた事は誰も知る所である。

四

かくして愈自力修行の門を辿りて種々に光りを求めるも得られぬのである。之が爲に久しき間煩悶懊惱する時代がある。親鸞聖人が十九歳の時河内國磯長の聖德太子の廟に參籠して道を求め、汝命根應十餘歳と云ふ靈告を蒙り、益十年の間苦勞せられたのである。終に二十九歳の時法然上人に遇ひ、選擇本願念佛を聞き立所に信仰に入られたのである。『御傳鈔』に

建仁第一の曆春の頃、聖人二十九歳、隱遁の志にひかれて源空上人の吉水の禪傍に尋ね参り王ひき。

とあるが即正しく人生の上に何の光りも見出すこと能はずし

て全く闇黒に陥り、只信仰の生命を求むるより外に道なき境涯になられた有様である。是迄のものと云へば人生の名譽、富貴は勿論のこと、學問も自力修行も一も何の役にもたぬやうになつた有様である。

五

今日青年道を求むるの人がもし學問や理窟で安心せんと思ふならば全く誤りである。

『口傳抄』に鎮西の修行者が法然上人にあはれた模様が詳しく描かれてある。この修行者は遠く鎮西より上人の噂を聴き都に上りて智恵第一の御僧の在すなれば一度相見えて、果して師とするに足るべき人ならば事へんとの心組で在つた。然して法然上人にあふて一言の問答の下に我慢を折て、師弟の禮を取られたのである。之れいかにも徳すぐれたる修行者の入門の様子がわかる。去りながら人生上何等の光りもなくなりた處へ唯一の恵みを頂きて絶対に安心をせられたる親鸞聖人の趣きと異なる點がある。

其の修行者が聖光上人で在つたと云ふことであるが、よし上人で在つたと否とを問はず、今は信仰問題につきいていふので、之が宗派根性で云ふやうな風になつてはいかぬが、信仰を求むるものゝ注意を要する所である。

畢竟この人生光りなき境涯に於て、學問や自己の修養の力が間にあふやうに思ふて居る餘地が存して居るだけ、それだけ自力が残るのである。

六

御傳抄の次の文に

是即世下り人拙くして、難行の小路迷ひ易きにより、易行の大道に赴かんとなり。

とある。これ即自力の何等の役にも立たぬことが分つて來た極點である。

抑法然上人が四十三歳に至るまで諸種の修行をなされたが安心が得られなんだ時に、黒谷の報恩藏に於て善導大師の『散善義』の一心専念彌陀名號、行住座臥不問時節久近、念々不捨者、是名正定之業、願彼佛願故とある文を見出すなり、選擇本願といへることに氣がつかれたと同様である。同時に布施持戒等の自力の修行の何の役にも立たぬことを見出して、他力念佛に入られたのである。さればこそ『選擇集』の初めには道綽禪師が聖道門を捨て、淨土門に入られたる文があげてある。

七

全體聖道淨土の教理といふことが、初めから哲學的分類のやうに自力と他力との二門ありといふてわけたのでない。從來自力の聖道門難行道を試みて終に何の光りも見出すことができなくなるやうになつて、他力念佛の淨土門易行道が絶対に輝てきた有様である。さればこそ唯有淨土一門可通入路とある。是に二つ道があるがどちらでも行けるといふことではない、一方の難行道は絶対に行けなくなりて、他力念佛の絶対唯一の大法が顯はれるのである。

八

現今青年が信仰を求むるに當て同様の経過を取つて居る。人生の諸々の出來事に突き當つて、種々に惱みいかに心を清

とするも、いかに立派に云ふて見ても、いかに修養の方法によるも、人生に光りの見出すことのできぬやうになつた時に信仰に入り易いのである。世の煩悶せる人が信仰に入るといふことに就て、動もすれば煩悶そのものが信仰に入る方法であるかの如く誤解する人がある。煩悶は入信の方法でない。併し煩悶の極に達したる時は學問も自力の修養も何の役にもたぬと云ふ境涯になるのである。

九

現今道を求むる青年に於て、他力を慕ひながら尙絕對他力に入ることのできぬのは、佛を自分の修養の模範としたり、標準としたりして居るからである。

青年は主觀的冥想に陥りて、冥想的に佛陀を觀じて之を目あてとして進つてをるものがある。近年見佛見神の實驗など世上の問題となりたる時に、多くの青年が冥想風に走つたのは之れである。則ち冥想により佛に接せんと企てるだけ自力が混つて居るのである。

又たある青年は大に理想的實行に傾く者がある。こは佛陀を自己の行爲の標準として理想として、其の如く行はんと試みたものである。

十

近頃世上に行はれたる傾向に就て云へば、彼のトルストイの無抵抗主義の實行の如きものである。トルストイ自身は自分の意見の上より云ひ出したる事なれども、之を聽く青年は自分はそれだけの力を持たずして、直に之を實行せんとして皆其の不可能を歎くのである。

十二

譬へば人ありて西に向て行くこと百千里であると云ふことは、即ち吾々が人生の旅をなすところである。然るに無人空曠の澤に彷徨ふと云ふは、信友善智識なき有様である。適切に云へば吾々が人生問題をつくる考へ来れば、恰も沙漠に彷徨せるが如く、人生の生命を見出す能はず、茫々漠々として適歸するなき有様である。

私などが人生問題に苦しんだる極、世の中に一の友人を見出す能はず、一の光明を見出す能はず、何とも致して見やうなき有様に陥つた心の状態である。平素は友あり親あり妻子あり學問理窟ありと考へたるも、終に之れ等に何等の力も見出すことのできなくなる有様である。

然るに其の茫漠の遠方より砂塵を立て、吾に迫り来る群賊がある。之は吾々の煩惱の六賊、換言すれば外界の吾々に對する誘惑である。

又一方には惡獸毒虫吾に來り近くのである。是即ち吾々の内心は蛇蝎奸詐の心である。かくの如く三方より襲はれ來りて如何ともすべからず、直に西に向て走れば忽然として大河あり、其の幅百歩兩方に邊畔を見ず、南の方は火焰天を焦かし北の方は波浪空に連なるあり。

火は瞋恚の火である。吾々一度怒を起せば曾て多少積み置きたる修養の善根功德と云ふ寶をやくの教である。水は貪慾の水で、悉く吾々の美心を汚かすものである。

十三

已に忽然としてこの大河前に横はる、奈何ともする能はず、

この冥想的煩悶と理想的煩悶とは、宗教の語を以て云へば定善と散善である。思慮凝心を定と云ひ、廢惡修善を散と云ふ。即ち冥想自力に依て佛に接せんとし、理想的に實行し佛に近かんとするものである。

處が絕對の信仰となればかくの如きものが役立つやうに思ふて居る間は自力が未だ残つて居るのである。是等も遂に何等の効もなく、人生進むこと能はず、退くこと能はず、絕對絶命一も據り所のなき時に、初めて吾々の上に無限大悲の恵みを以て助け給ふ所の佛陀の慈悲が照して下さるのである。是に於て他力信仰の道程を示す最も適切なる記載が、善導大師二河白道の譬喩である。

十一

古來基督教に於てバンヤンの『天路歷程』は信仰の道程として有名なものである。而して善導大師の二河白道の譬喩の如きは、絕對他力の信仰道程を描けるものとして、殆ど世界比類なきものである。

而して世人が未だ『天路歷程』の譬喩程に之を知らぬといふことは遺憾の極みである。一は是を説くものが只譬喩自身にのみ目をつけて、其の譬喩に含まつて居る信仰上の實驗的の内心を味はぬからである。

バンヤンの『天路歷程』はもろ／＼の修業を積みて最後に光りを見出すといふ自力修行の意味が多い。然るに二河白道の譬喩に至ては絕對他力の信仰の有様が遺憾なく描かれてある。何人も知る所なれ共、殊に世の注意を促す爲めにその著しき點を述べて見やう。

進まぬか進むに道なく、退かぬか退くに所なし、即行くも亦死せん、返るも亦死せん、住るも亦死せん、一として死を免かれず、是絕對絶命の境涯である。

然るに水火の中間に四五寸の白道がある、そこでこの人思ふには既にこの道あり行くべしと、之れ吾々が人生の旅に疲れ煩悶懊惱を経たる後、兎に角是に無碍の一道がある、道がある以上は行けぬ筈はない。この道を求めて行かんと求道心を起した處である。

東岸に忽ち人の呼ぶ聲ありて曰く、仁者其道を尋て行け、汝死の難なけん。是即釋尊寂滅の雲に隠れ給ひしより既に二千年餘年、面のあたり見上ずと雖、遺教ありて吾等に無碍の一道を示し給ふことに譬へたのである。即ちこの人のこの道を行かんとして一歩二歩するに、群賊惡獸呼んで曰く、其道極めて險惡なり、必ず行くことを得ず、吾等惡心ありて汝に向ふに非らず、返り來れと。是即人が信仰の道を辿ると雖も外界の誘惑内心の煩惱忽ち吾等に詐り親みて退轉せしむる有様である。

十四

善導大師は是に異學異見別解別行の人と説いてある。即乾燥なる理論、冷なる哲學、理想的の實行、冥想的の修養、ありとあらゆるものが吾々を招き返すのである。

この時即ち西岸上に人在于て呼んで曰く、「汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、總て水火の二河に墮せんとを恐れざれ。」是即絕對佛陀の慈悲本願召換の御聲の聞えた時である。

親鸞聖人愚禿鈔に「西岸上に入ありて呼て曰くとは、阿彌陀如來の誓願なり、汝の言は行者なり、則必定の菩薩、正定聚の人、希有人、最勝人、妙好人、上乘人、眞の佛弟子なり」と云へり。即吾々は佛陀の恵みに接するなり、是に於て始めて佛子の自覺を生じ如來慈悲の子として呼ばれたのである。

一心正念は、一心とは眞實の信心なり、正念とは念佛なり、直に來れとは諸々の自力のかはり道に行かすして、直に如來の本願の大道に來れとなり、吾能く汝を護らん、吾とは盡十方無碍光如來なり。

あまり譬に氣をとられて内心の實驗を忘れてはならぬ。如來が我と呼び給ふ聲は小さな我でない。盡十方無碍光、無限大悲の御身である。能くと云へる一字は如來が我を救ひ能ふ御力の吾々に届いた有様である。

十五

いかに如來の慈悲は深しと雖、よもや吾如き惡しき者は助からぬであらうと云ふは、疑心自力の人にして、この能くの一宇が分らぬのである。汝を護らんとは佛の光に護られ攝取不捨されたのである。是れ即ち初めより申したる信樂開發の一念、絶對他力の念佛、無碍の白道に安住したる有様である。

以上述べ來りたる所、愈金剛不壞の信仰に入りたる有様である。一度この信仰に入りたる上は、吾々はこの信仰の一道を辿りて飽くまで、臨終まで相續するのである。

今の譬喩を以て言へば一度西岸上の聲を聞くなり、行者は只之れを仰て疑怯退心を生ぜず、念々に忘るゝことなくして彼の願力の道に乗るのである。而して貪慾の彼來て道を濕

し、瞋恚の焰道を焼く。然るに少しも之等を顧みず、只御聲を仰て近づくのである。之即信仰以後の人生生活の道程である。

十六

昔この二河白道を畫工にたのんでかゝせた人があつた。然るにその繪に東岸より、西岸まで白道が明かに一直線にかいて在つたから、これはいかぬと云ふてその火と水が上にかぶさつて其間に白道が所々斷絶して貫いてあるやうにかき直させたと云ふことである。

是實に信仰生活は決していつも現在のみに在つて、煩惱がないといふことではない。信仰以後と雖もやはり貪慾瞋恚の煩惱はある、この煩惱より信仰の光りが顯はれて來る、これ信仰生活の光景である。

吾々人間、道を求めるものが、いかに信仰以後と雖も全く煩惱なき人生を實現できるやうに思ふならば誤りである。又この行者が首を垂れて行く畫をかけた所之をば正された。即仰いて西岸上に向て行くが故頭を下げてはいかぬといふのである。

あゝ吾々は自身の足もとのみに氣を取られて居りはせぬか。目前水火の二河に墮ちはせぬかと、足もとのみ氣を取られてはならぬ。二河に墮ちてはならぬ。たとへ水火の難ありと雖、仰て如來の御聲に深く歸して直進せねばならぬと云ふことである。以上は信仰以後の人生に於ける道程である。

十七

かくて百歩の途を終へて西岸に至りて善友相見えて慶樂すること何ぞ極まらんとある。百歩とあるは人壽百歳の人生で

慶

讚

十七 憲法

近角常觀

第一條

一日以和爲貴、无忤爲宗、人皆有黨、亦少達者。是以或不順君父、乍違于鄰里。然上和下睦、諸於論事、則事理自通、何事不成。

かくて信仰問題の道程が終つたのである。然れども絶對の大道は無限である。一度本覺の淨土に返れば他の醉えるもの眠れるものを起し導かんか爲に人生に顯現するのである。之れ如來の應化身と同じく、この度は生死の園、煩惱の林に遊戲して衆生濟度するのである。是即ち還相回向である。如是往相還相の道行さか、皆唯一南無阿彌陀佛に依て吾等に與へらるゝが一念開發の信仰無碍の大道である。

已上は信仰の道程といふ題の下に、自分の實驗の上より他力信仰の道程を述べたのである。

第一條は人生問題の眼目を掲げ來りて、以て之が解決を適切に與へたまひたるものである。以和爲貴、无忤爲宗の八字は即ち人生問題の結局にして十七憲法の凡てが此問題を圓滿に解決するためである、言を換へて之を言はゞ抑々人生上にあらはれたる古今東西大小幾多の問題も畢竟此問題に過ぎぬのである、一個人としては自他の間に少しの隔意なき融和が道德の根底である、一家としては家内中の圓滿なる調和か家庭問題の眼目である、一郷として隣人相愛して反目なき



が自治の源である、一國としては群臣百姓、上下の一致が古今政治問題の主眼である、而して現今の如く列國相對峙して國際問題の紛糾を極むるも畢竟世界の太平和が最大の目的たることは言ふまでもない、しからは以和爲貴無忤爲宗といふ問題は人間としては是非解決せねばならぬ問題にして、幸に十分之が解決を得たならば人生細大の問題につきて其秘鑰を握りたと言はねばならぬ、以和爲貴の文字は禮記儒行若くは論語學而の文字を用ゐたるものなれども、單に教訓的に律法的に示したまひたものではない、人生に於ける大宿題を解かんがために、先づ劈頭に其題目を掲げられたるものである。

此の如き個人間より世界上に至るまで何人も待期して止まざる以和爲貴、無忤爲宗が容易に實現し得ざる所以のものは何故であるか、此に於てや次の文に人皆有黨、亦少達者と、正に其病根を削り出したのである、實に個人間の調和より世界の平和に至るまで結局之を實現することの出来ぬは黨與偏倚するところがあるからである、而して抑々黨與偏倚の源は畢竟自己を標準として互に他を排擠するからである、其結果たるや甚しきに至りては君父に反抗するに至る、故に

ではない、私も久しき間此問題につきては不審が晴れなんだ、簡言すれば聖德太子の降魔成道は如何なる時かと言ふことである、是今の剴切なる言語の出づる所以である、即ち當時の朝廷に於て物部蘇我の兩氏が遠く神功皇后三韓征伐の昔より二派に分れ黨派を構へ、其結果累々皇室に及ぼしたる事實を生し來りたのである、而して皇太子は恰も其間に生長して、而も純潔清淨なる大平和の理想を有したまふたのであるから其苦心慘愴の御心情十二分に察したてまつるべきである、皇太子の御地位は恰も石臼の心棒とも言ふべきである、兩派軋轢の間に立ちて身を磨擦の爲にけづらるゝやうなものである、聖德太子の宗教的實驗は確に此間に於て大成せられたのである、かく分かりて見ればかくなくてはならぬ譯になりてある、釋尊は出家入山したまひたるが故に樹下石上に降魔成道したまひたのであるが、聖德太子は在家在俗の儘にして三寶興隆したまひたるのであるから、朝廷の黨派軋轢の間に降魔成道の實驗即ち信仰的光明を見出されたは、如何にも尤のことである、全體吾人が信仰を見出す活舞臺は人生其物である、必しも讀書禮佛によりてのみ信仰を獲得すべきものでない、人生幾多の艱難は却て偉大なる光明を自覺すべき因縁で

次の文に是。是以。或。不。順。君。父。作。違。干。隣。里。とまで極言せられたる次第である、即ち、僅かに自己を標準として其思ひ通りに遣り通すときは、君父に順ならざる事さへ起り、又小にしては忽ち其隣人里閭の間に不和を起すものであるといふことである。

抑々此の如き剴切なる訓誡、殆んど肺腑を刺すが如き解決を與へんとせらるゝは聖德太子が決して言論文字の上に於て申さるゝのではない、實に血あり、涙ある、大實驗の上よりあらはれ出づる結果である、既に序論にも斷定したる如く聖德太子は和國の教主として、尊崇すべき御方である、即日本の釋尊なりとして見るときは、問題となるべきは聖德太子の信仰的實驗の經過である、大聖釋尊明らかに八相成道の事實があり、殊に入山學道、降魔成道の實驗は明に千古宗教的實驗の模範とも源泉とも見るべきことは明らかである、然るに聖德太子の歴史には之に該當すべき事實を見出さぬ様なるものである、皇太子は所謂生知にして、生れながらにして聖人たるの器たることは一點も疑ふべからざることであるが、併人生上にあらはるゝには矢張何等かの實驗なくてはならぬ筈である、即ち克念作聖と仰せられたる事は決して無意味

ある、世の道德問題に泣き、家庭問題に泣き又社會、國家、世界を以て憂とするの人は須らく自己が境遇及び眼前の事件を縁として眞諦の光を認むべきである。

トルストイが十九世紀の歐羅巴の強食弱肉、優勝劣敗の思想界に向て一道の光明を與へたも畢竟此問題の解決である、ものは畢竟生きたる問題に向て痛快なる解決を下したからである、即ち無抵抗主義である、惡に敵する勿れ、敵を愛せよ、目を以て目を償ふなかれ、齒を以て齒を償ふなかれ、人汝の右の頬を打たば亦左の頬をも打たしめよ、人汝の上衣を奪はば下衣をも與へよといふのである、若し分り安く通俗に云ふならば暖簾と腕押は出來ぬといふことになる、即ち一方か如何に無理をなすも、亂暴をなすも、一方が之に對して五分五分の態度を取り相争ふことなかつたならば無理なるものも、亂暴なるものも、恐くは如何ともすべからざることになるであらう、トルストイの説はたしかに眞理たるに違ひない、然れども現今日本に於てトルストイを崇拜する人の多くは誤謬に陥りて居る、何となれば其人達は人生に對して無抵抗的態度

を取らんとし、苦心しつゝ、而も無抵抗になり得ないのに苦しんで居る人が多い、それは何故かといふにトルストイの無抵抗主義といふたる言語を直ちに律法主義にとりて強て無抵抗にせんと欲して、出来得ぬのである、それは出来得ぬ筈である、何故なれば未だ無抵抗に爲し得る力を得ぬからである、其力といふは即ち内心に於て實驗の光を認むることである、抑々五分五分の人間が相集りて一方が他方に對して絶對的に無抵抗たる態度を取り得らるべき筈がない、無抵抗にするには夫丈の内的實驗がなくてはいかぬ、トルストイの如きも自ら告白懺悔せるが如く、大に苦み苦み、遂に一の光明を見出し、其見地より人生に處する態度を立言して無抵抗主義といふたのである、夫故トルストイの後を襲がんと欲せば、トルストイ自身、通りたる實驗、夫自身を得ねばとて、之を實行する、ことは出来ぬのである、日本現時のトルストイ主義者は此點に氣が付かずして大に苦しみつゝあるは氣の毒なるとである、此點に於てはトルストイ自身に於ても罪ある次第である、何んとなればトルストイ自身が人に其實驗を與へることを勉めずして、徒に無抵抗にせよといふ教訓を與へるからである。

信の伴はぬ行は虚假の行である、信念なき善行は動もすれ

我、敵視の私が安心を見出し得べき源泉は此の如き私に對して無抵抗の態度を以て遇する人を見出し得べきや否やの一點にあつた、而して人生事實に於て之を見出し得べからざることは明々白々の事である、此に於て絶體絶命である、而して最後に遂に此無抵抗の人を見出し得たのである、全體無抵抗といふ言語から抵抗的角がたちすぎる、相對的で不適切である、寧ろ無碍の人といふ方がよい、無碍の人といふ即ち佛陀夫自身である、此に於てや明々白々地に佛陀を認めた次第である、一たび此無碍の人を見出すなり其無碍の心によりて圓融せられて、何んとも言ふべからざる無碍の光明の中に攝取せられた境界である。

全體他人を敵視し、人生を抵抗視しながら之に對して其敵を愛し、其人生に無抵抗たらんとする既に不可能の事であり又矛盾の問題である、故に無抵抗の實驗といふは我が無抵抗にするといふよりは人生其物が無抵抗であり、敵も味方もなきものである、といふことを自覺することが必要である、しかるに日夜自他抵抗敵視の間に處しながら無抵抗無碍と大觀することは困難である、唯其抵抗敵視の間に於て一點の無碍の光、絶對の慈愛、即ちいかなる抵抗敵視の人生をも之を捨てざ

ば偽善に陥るものである、無抵抗にすべき實驗なき無抵抗は矢張一種の抵抗である、世人は抵抗するが我は之に對して無抵抗にせんとし、一種の抵抗である此に於て無抵抗は理想であつて眞に無抵抗にするといふことは出来得べからざることになる、私が人生問題に苦みたるも實に此點にありたのである、私は今より十三年前宗教界の宗教改革の問題が動機となりて、遂に人生は全體の問題に苦しみたるも結局この以和爲貴無忤爲宗を實現したいためであつた、而して自己は公明なるつもりであり、正大なるつもりであつたのに、いつの間にか、他に對して隔意を生じ、疑惑を抱き、不安の念を生ずるに至りたるときは、遂に自己自身が人皆有黨、亦少達者一の圈内の者となり了した、そこで自己の罪惡に氣付き、自己を標準とするの惡しさを悟りて自己を捨て、我慢を捨て、絶對無我、無抵抗の態度に出てんとすれど、自らなり能はず、勉むれば勉むる程益々苦しみて殆んど身を措く所なきに至つた次第である、『懺悔錄』を熟讀して下さつた人は十分御承知の事であれば詳しきことは省略します。

私の實驗は自己に於て徹頭徹尾無抵抗の態度を見出し、あたはざるものたることを認むると同時に、唯此の如き抵抗、有

るのみならず、之が爲に悲憫哀感の涙を注ぎたまふ佛陀を見出し來りたるのが信仰である、而して其一點の光がやがて全體の光である、其慈感の光を認むると同時に從來眼前に遮りたる抵抗敵視の雲霧は消散して、人生は無碍の光を以て充たされつゝあることを發見する次第である、此に至りて人生が無抵抗である、無碍である、たとひ抵抗敵視の事實はありとするも、一たび無碍の光を見出したる已上は畢竟我をして此光を見出すべく、猶味ふべく、佛陀の與へられたる事實と見へるゆへに自然々々に我よりも無抵抗の態度に出てらるゝ次第である、とにかく、人生の間に一點の無碍の光を見出せば、やがて是れ盡十方無碍光である、此に於て如何なる黨派偏倚も融和すべきである、如何なる昔年の恩讎も喜んで手を握り得べきである、即ちジャータカにカーシーのプラマダッタ王とコサラのデールカユ太子と相融和したる如くである、法句經の格言は『人生は怨は怨によりて止むべからず、怨は怨まざるによりて止むべし、是其性也』といふ所以なり、そこで結文に然上和下睦、諧於論事、則事理自通、何事不成とあるのである。

全體十七憲法の各條何れも文字簡潔にして而も意味を盡す

事十分である、殊に各條先初めに題目を提起し、必ず消極積極の兩方面より反覆することゝなつてある、此章でも以て和爲貴無忤爲宗は題目である。人皆有黨云は消極的に言ふたのである、上和下睦云は積極的に言ふたのである、甚しきに至りては幾度となく丁寧に繰返してあることがある、各條熟讀して見れば無限の味がある、上和下睦諸論事といふは即ち、無抵抗源泉たる無碍の佛陀の光明を見出して絶対の融和を見出したことである、抑々一個人間の道徳問題を初めとして家庭問題、政治問題、國際問題に至る迄、此絶対の光明によりて平和圓滿の解決を得べきである、而して之を聖德太子の歴史的事實に於て明らかに實證されてある、聖德太子の家庭の圓滿なる理想的實現たることは明らかなる事實にして他日詳論することゝして、太子の聖德遂に従來朝廷間に於ける權臣軋轢の跡を絶ちて太子攝政の下に理想的政治を實現して其治世の下黄金時代を實現し、又外交に於ても從來の三韓軋轢、新羅叛亂の禍根を爰除して、朝鮮をして中心悅服來朝せしめ、交を隋に結びて平和の國際禮讓の下に而も日出國の態度を保ち、驕らず、阿らず、無碍の光を放ちて文明的外交を實現せられたることによりて以て如何に上和下睦事を論ずる

に諸ふかを知るべきである、夫れ抵抗軋轢するものは磨擦の爲に其勢力を減殺するものである、しかるに相互和睦するときは其勢力は合して二倍となりて同方向に働くが故に事理自通何事不成である。

最後にトルストイの無抵抗主義に伴へる最も著しき缺點を注意して置かねばならぬ、トルストイは無抵抗といふ意味を必ず人に與へるとする意義に解して居る様である、故にトルストイ主義を律法主義に解して居る人は勿論、たとひ其實驗を理解し得たる人でも、無抵抗といふは如何に人が無理をなすも、亂暴をなすも之に譲り之に與へ、之に抵抗しないといふことゝして居る、切言せば矢張無抵抗といふことを形に於て退讓主義を取ることに誤解して居る、是れ眞の無碍を實驗せざるの證である、眞の無碍の境に達すれば必しも退讓主義を取らねばならぬといふことではない、畢竟心中滯りなくなりたるならば進退出入取捨與奪自由自在にならねばならぬ、通俗に領解し安く言へば他人同士相譲り相與へるといふは如何にも文明紳士の態度であるが、親子の間に於て眞の絶対無碍の愛を實現するに至らば、子として惡しきことあらば少しも用捨なく親の慈愛は之を訓誡して改めしむるものであらぬ

を蔑みするものにして、相對に偏して眞の絶対無碍の光を認め得ぬもの大に戒むべきである、故に此第一條の人生問題の根本たる以和爲貴無忤爲宗を解決するには眞諦絶対の信仰を待つべきである此に於てや第二條の篤敬三寶を喚び起し來るのである、是人生、社會、國家、世界の太平和の根本歸結である。



ばならぬ、父は子の爲に隱し、子は父の爲に隱す、直きこと其中に在りといふ境に達せねばならぬ、絶対の信仰より實現する無碍の内治外交は固より平地に波瀾を起す底の抵抗的では不可であるが、さりとて退讓的態度と誤解すべからず、必ず進退與奪無碍自在の立脚を得ずんば事理自通何事不成とは言ふべからずである、此に於て信仰より起り來る社會百般の制度の存在を認めることが出来る、トルストイが無抵抗を主張するの極國家を否定し、制度を否定し法律を否定し、裁判を否定するが如きは、たしかに未だ此境を認め得ざるものと言はねばならぬ、即ち絶対より相對に出て得ざるの信仰である、三角形の頂點を以て立たんとするが如き不安定の信仰である必ず顛覆すべき信仰である、しかるに眞の無碍に達したる信仰は三角形の底邊を以て立てる安定確立の信仰である、故に山背王の如く與ふるときには身命財を敵に與ふことも出来るが、又奪ふときには皇太子の守屋を亡したまひし如くすることも出来る、三韓を膺懲して其膽を碎き、又刃に朗らずして大平を來すことが出来るのである、併如何に與奪自由なればとて徒に干戈を動かし、他を蠶食し、人を死刑に處して以て威嚴を保たんとする如きは、其根本の平和を忘れ生靈の救済

嘆
咏

營中雜歌

増田八風

送り來しはらからかへず廣庭に公孫樹黃葉はら
くと散る。

日々のつとめひまなみ知らぬ間に公孫樹黃葉散
り果てにけり。

廣庭に駒を並べてならず日を伊吹が嶽に雪ふり
やまず。

水かひてぬらし、駒のひけの毛に氷結べり手入
する間に。

手入するかな櫛にぎるつめたさに銜かむ駒をあ
はれと思ふ。

逃げ出でし駒打連れて廣庭の霜を蹴りつゝ戯れ
めぐる。

燈を消して吾がねるとこの中に風呂の水汲む音
きこゆなり。

故里にかへる同じき夢をしも三度び我が見ぬ一
夜の中に。

野邊山へ駒ひきめぐり暮したる夕を望むふるさ
との山。

雨晴れし庭に寢蓐を運び出で、ひろげ終れば日
は出てにけり。

ひろげ干す寢蓐の上に白鳩の下り居る見れば心
なごみぬ。

故里ゆ海のあなたに見し山を春の足日に駒ひき
て越ゆ。

遠見ゆる火影たのしみ來し里に竟に宿らずいく
たび過ぎし。

國民のつとめを終へて出づる日を庭の公孫樹に
春の雨降る。

時
報

歸省傳道

三月の初め我が法主臺下、我が生郷江州湖北を巡錫したまふことをきき、法駕を迎えたてまつらんとて二月二十八日夜汽車にて出立、一日の朝米原に着す、母上亦迎へたてまつらんとて來りたまふ、既にして南條師隨行長として東京より來り會したまふを迎え、午前十時臺下京都より巡化したまひ米原を過ぎりたまふ、乃ちつゝしみて迎へたてまつり、長岡まで隨ひて送りたてまつる、里人の子來て迎えてまつるもの雲の如く集り來る、寒風凜冽として殘雪猶深し、一行田舎道の邇迤として迂廻極まりなき間を行きたまふ、遙かに見送りたてまつりて長濱にて待ちたてまつらんとて着す、村瀬嘉平氏既に停車場にて待ち受けらる、乃ち氏の厚意を拜受して、母と共に氏の宅に泊る、法話絶ゆる時なし、晚陰臺下長濱別院に着したまふ、和顔愛語にして意を先にして承問したまふ、人皆悦服せざるなし、翌朝親教を拜聴す、人皆歎服感激せざるものなし、同日歸郷有縁の御同行に法を説き、臺下を迎へたてまつる精神的準備に供ふ、五日臺下は正しく生郷に近き増田村眞宗寺に下向したまひ、山本村正賢寺に宿したまふ、余は馬渡橋畔水青く山白き處に迎へたてまつり、舊知たる朝日山の麓上人に謁し奉り無限の感謝に堪へざるものあり。翌朝味爽

勤行終り、余が嘗て學びたりし朝日小學校に親臨したまひ、兒童のために四恩の重んずべきを親教したまふ、此日風雨激甚然れども路傍拜する者をして満足せしめんが爲に幌を下さずして洋傘を以て行かる、洋傘風雨の爲に折る、即ち雨傘を用ゐて行き給ふ、此夜杉野山中雪なほ三四尺も堆き郷に泊し給ふ、以て如何に巡化の御苦勞を感ずべきなり、七日余長濱青年會の紀念演説會に臨む、人生問題に就きて實驗を演ぶる事深刻、眞摯に道を求むる者多し、此晚臺下恰かも湖北の巡教を終りて敦賀より歸途長濱を過ぎり給ふ、即ち、青年會員と共に謹しみて奉送す、

爾後數日間故郷に滞在して傳道す、翌八日大光寺報恩社に同夜朝日小學校校友會に、十日高田法友會に、十二日弓削村有志の爲に講話す、是聖德太子の建立にかゝる満願寺の在りし處、其本尊觀世音菩薩は靈像にして、昨年求道誌表紙圖案に模寫し奉りしもの六年前始めて國寶に選定されし時、余招がられて傳道せしが、今や正に其修繕功を峻りたるの時又法を説く誠に不可思議の宿縁と云ふべし、其始めて傳道せし時郷人藤澤萬九郎氏道に志せしが昨年秋入信歡喜の人となり、今や其家に招かれて、詳に其宿縁を尋ねるに、氏は嘗て香樹院師の同行、釋了信の嫡孫なりと云ふ、以て佛縁の空からざるを知るべし、九日十日十一日は自坊に在りて傳道し、且つ先考の祥月忌を營む、

十三日出立同日夜及翌日終日湖南愛知郡吉田村正法寺に於て傳道す住職吉田龍誓君は數年間東京に在りて、求道會の朋朋たり、今特に京都求道會と往復せる熱心なる傳道者也、昨

年予一び此寺に行き、今年再び行く、而して恰も太子御遠忌前に當るを以て、特に皇太子の聖德及び聖人との關係を説くこと切也。

十五日夜十一時出立、人力車を以て夜中三里彦根に着し、急行列車を以て三時大垣に下車し、寒風凜冽河に沿ひ長堤三里、夜將に曙ならんとするの頃今尾町に着す、中島靈賢氏の寺に於て佛陀會の希望により其日及夜翌朝講話す、同地小學校教員能戸君、卅八年來求道會の同朋たり、氏も奇遇を歡び予亦佛智不思議を感謝したてまつる、十八十九の兩日は高須別院に於て佛道す、嘗て同地の高浦尚賢氏予か書せる後藤祐護老師の紀念碑を見たまひしが縁となりて、遂に老氏及び服部龍曉小串惠靜氏等の發起により初めて南濃に傳道するを得たり、宿縁洵に不可思議と謂ふべし、同地は古來藩公を初めとして信仰深厚の地たりしが、殊に近年同地思想界漸く新ならんとし、眞摯なる求道の機運正に熾なり、而して臺下昨年已來數回巡錫したまひしに於てをや二日間の傳道著しき效果を見出し得たり、十八日夜伊藤氏宅に於て少數者の信仰談話會を開き、内原實驗を語る、伊藤加藤太田氏の企つる所、翌廿日太田村太田教尊氏の寺に於て開會、曾根氏宅に宿泊、談話會を開く、殆んど高須と同じ、廿一日出立尾張伊勢三河傳道概況は次號に譲る。

求道會館設立喜捨金 受領報告 (第卅九回)

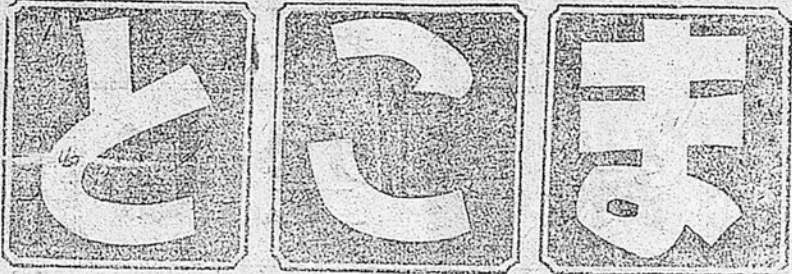
一金壹圓也	島根	三瓶	德英殿
一金壹圓也	名古屋	大島和吉郎殿	
一金五圓也	東京	板橋	盛俊殿
一金壹圓也	香川	鈴木喜三郎殿	
一金五圓也	花巻	宮澤政次郎殿	
一金壹圓也	中野	小牧	莊藏殿
一金參圓也	東京	長尾加壽子殿	
一金參圓也	神戶	増谷	壽子殿
一金壹圓也	越中	井澤清三郎殿	
一金壹圓也	長濱	村瀬	嘉平殿
一金壹圓也	美濃	能戸	得一殿

小計貳拾參圓也

通計參千百貳拾貳圓◎四錢也

右御寄附と忝うし難有く奉ハ
候茲に謹みて奉感謝候也

新しき生命



新しき生活

りな點四の麗美易平新清粹純は色特の誌本

初 號 目 次

▲發刊の辭………記者
▲如何にせば生甲斐ありや………本領
▲身を捨てて求むる心………本領
▲今晩は………南條文雄
▲虚の世實の世………上杉文秀
▲法を聞く用意………往田智見
▲大和の清九郎………山田文昭

▲母の自督帳………佐久間孝淳
▲夜學………長澤諦遠
▲病人の枕邊に語りし安心談………往田智見
▲亡友の手紙………山田文昭
▲貧しさへの仕合………大池惠長
▲同通信………記者
▲安心小品七種………記者
▲まこと發行に就いて………記者

住田智見 山田文昭
長澤諦遠 佐久間孝淳等

初號發刊四月一日

定 規

毎月一回一日發行
定價一部三錢郵稅五厘
半年分郵稅共貳拾錢
一年分郵稅共四拾錢
振替に依り郵稅引換
購読歡迎
刷版廿四頁 用紙 印
刷最良

▲この雜誌は他力念佛の大切などところだけ寄り抜いて記したものでありまづ。此の世の日送りに味はつた教の甘味を、少しも飾らずに打出した有りがたいとほときお話ばかりが載せてあります。
▲この雜誌は假名の讀める人なら誰れでも會得が出来ます、殊に地方にあるお方の讀物として至極相當したものであります。
▲此世の日暮しが面白くないとか、行末が落付かれぬとか、いふお方は是非御覽なさい。心がひらく迄親切に御相談致します。

修道社
店書江森

○五四町塚中庚鴨巢京東
目丁貳町木春區郷本京東
【番九一二八京東座口替振】

編輯所
發行所

新刊 宗教問題

眞宗大學教授 和田龍造先生著
國家には國家の問題あり、家庭には家庭の問題があるやうに、宗教には宗教の問題がある。宗教の問題の内でも、宗教の内容についての問題と外形についての問題と二つがある。宗教の問題の中には信仰の問題あり、修養の問題あり、歴史の問題がある。本書は著者多年眞宗大學に佛敎の歴史を講ずるの傍に、是等諸問題について信仰の上より學解の上より解決を下したる著述である。故て宗教問題に心を傾けらるゝ江湖の道友の一讀をすゝむ。

金六十錢 郵税八錢 クロース線

新刊 惠空語錄

著 生 先 敏 烏 曉

親鸞聖人滅後二百年にして蓮如上人あり、蓮如上人滅後二百年にして我惠空師あり、能く、絶待他力の大道を宣布せられたり。師は琢如上人の信頼を受け、一派最初の學頭となり、信仰の鼓吹に務めらる。書を講ずるの際には千二百の僧侶集へりといふ、如何に徳化の恰ねかりしを知るべし。予師の著書に接して感化を受くる數年、今その信味に關する敎訓を援筆し名けて「惠空語錄」と云ひ以て同信の友の机上に進めんとす。信友幸に本書により他力の深重なるを味ひたまへ。

(編者 識)

錢八十包小金 頁餘百四版六四 本美綴スロク

新刊 信仰五部書

金四拾錢 郵税四錢 クロース線

本書は、親鸞聖人、蓮如上人等の御形見である、歎異抄、末燈抄、御消息集、御一代問書、安心決定鈔の五書を匯集したのである。此五書の尊いことは云ふまでもない。此世に大火難が起つて、人間の萬巻の書を燬失しても、此の五書にして存すれば、世人は誠に其の災の小さなを喜ばねばならぬ。他力敎の奥底をたゞいて、信仰の妙なる證え、永へ口金石の響を傳ふる本書は、誠に世の大燈明である。

二 三 一 三 京 東 替 振 房 山 我 無 五 三 二 鳴 巢 京 東

局輯編館藏法 家大敎說案新 案立師縁靜淵田

布敎大辭典

◎布敎界空前絶後の新提供◎

戊申勤儉布敎資料

製本 平假名振假名付 全文五號活字 全六寸四寸三分 總布クロース線 定 價 金 五 圓 外 金 五 圓 豫約價貳圓八拾錢 郵税拾錢 豫約期限 明治四十四年四月 順上旬より送本 定價金廿五錢 郵 求 道 讀 者 稅 不 要

館藏法 番八五二二話電 市都京 番四〇七一座口阪大 條六東 所行發

針指良の仰信養修は光靈
りな伴侶好の庭家てしに
他其士博田前號毎は光靈
す載滿を説卓論名の家大

靈光

靈光第三年第三號目次 (三月一日發行)

- ◎信念の標的
- ◎救はれて何を受くべきか
- ◎職務をとる時此言を思へ
- ◎日本人と宗教
- ◎實業家の修養
- ◎俳句
- ◎和歌

若 田 菜 龍 會
羽 溪 了 晴
高 楠 順 次 郎
前 田 慧 雲
佐 々 木 祐 言

◎和歌
◎水に對する感謝
◎人の虚榮心
◎神戶だより
◎大阪だより
◎山口だより
◎明石だより
◎讀水欄
發行所 神戶中山手通四丁目 靈光社
振替口座東京二〇五〇
東京本郷春木町三丁目 盛森興
東京本郷元富土町二丁目 江教書堂
東京本郷元富土町二丁目 盛森興

東京堂

前號要目

求道

◎無碍の一道

自督

◎不思議の佛智

◎火宅無常

講話

◎逆縁即恩寵

告白

◎理想を求めて信仰を得たり

近角常觀

清火子三郎

聖傳

◎チャータカ釋尊傳

第十 愛の毒矢

第十一 食を食りし鹿の話

第十二 學ばざりし鹿の話

第十三 賢き鹿の話

第十四 風

第十五 犧牲

講義

◎歎異鈔——第十一章

近角常觀

時報

◎羽村